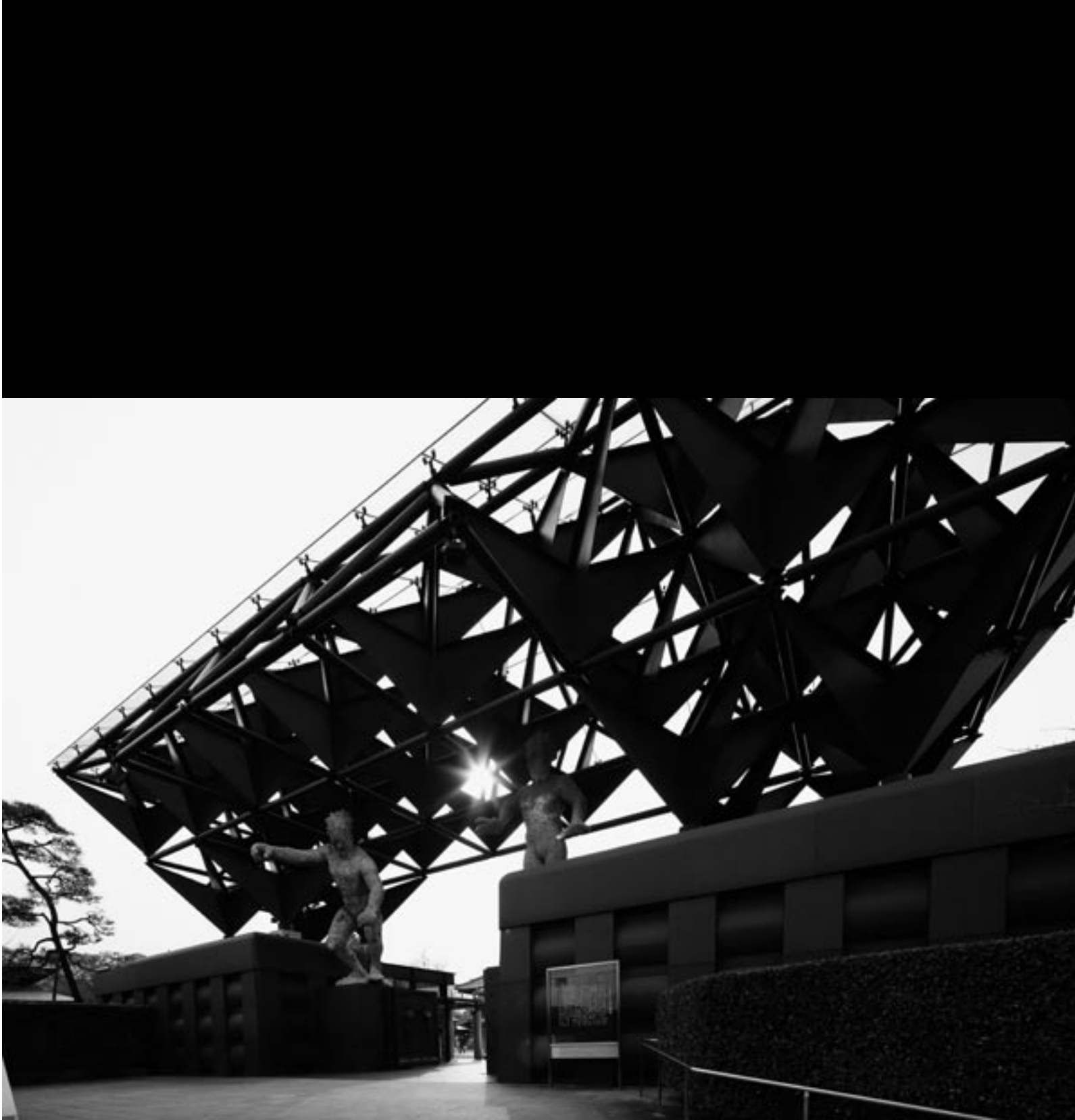




建築人

4

2014



大阪ホンマもん

建築人

4
2014

目次

大阪ホンマもん

インフォメーション・事業案内 今月の委員会だより

建築人

東畑謙三

記憶の建築 松隈洋

秩父セメント第2工場 1956年 清潔で美しい工場をめざして

Gallery 建築作品紹介

ミルボン中央研究所

設計 竹中工務店

施工 竹中工務店

いたみ犬猫病院

設計 北村陸夫＋ズーム計画工房

施工 有村工務店

株式会社 藤枝研磨工業所 篠山工場 第5工場

設計 筑波建築設計工房

施工 本間組 関西支店

建築の射程 石田文章

「光のまちづくり」による大阪の都市魅力向上

匠の巧

あかりが照らすもの アカリ・アンド・デザイン 吉野弘恵

第33回大阪市景観建築賞入賞作品

理事会報告 建築相談 編集後記

つづけていくことの意味

建築情報委員会 筑波幸一郎

『建築人』は今月号で新創刊から三年目を迎えます。通算で新創刊二十五号目、前身の「HIROBA」時代からすると五百九十八号目になります。つづけていくことの難しさ、大切さを実感しています。

今、世の中がどんどん細分化して小さな世界に分裂しています。あらゆる世代が共有し誰もが理解できる共通項のある時代は過去のものとなり、細分化の時代がやってきました。若い世代はどんどんとマニアックになって、興味の対象が分散して共通項が少なくなっています。あらゆる世代が共有できる共通項である「ものごと」がなくなっていると言ってもいいかもしれません。

そういった状況では、ものづくりを含めてひとつのことを長く続けることが難しくなっています。これから『建築人』を続けていくにあたっては、それらを踏まえてどのような情報発信をしていくことが重要かを常に考えていくことが大切だと思います。

私たち建築士は、与条件やさまざまな課題を見つけ、それらを整理し、予算やスケジュールを踏まえて設計をおこない、何も無いところから「ものごと」をつくりだしています。そこにはいろいろな分野や異なった立場から多くの人々が関わっています。そのような多様な建築士が属する建築士会は、何が重要かを考えていくのに最適な場だと考えています。

つづけていくことは、たぐさんの先輩方がつくり出した「ものごと」を受け継ぎ、次の世代へときちんと継承していくことだと言えます。建築人もこれからさまざまな枠組みを使いながら長く情報発信を続けていく「ものごと」となって欲しいと願っています。

大阪ホンマもん解説

写真 田籠哲也 文 牧野隆義

大阪市を縦断する上町台地。その上町断層に位置し、現代アートを思わせる山門が目を引き寺が「一心寺」だ。

寺は文治元年（二八五年）、法然上人が四天王寺西門の西側にあたり、草庵を結んだのが始まりとされる浄土宗の寺院。「お骨の寺」としても知られ、納骨堂には人骨でつくられた仏像が安置されている。始まりは、江戸時代末期からで、宗派を問わず庶民が納骨に訪れた。明治二〇年（一八七七年）に約五万体の納骨で「お骨佛」がつくられて以来、一〇年ごとに一体の仏像をつくり続け、三体がつくられたが、戦火で六体が消失したため、納骨堂には七体が奉られている。

先に記した大阪大空襲により塔堂伽藍のほとんどが消失。現在の建物は戦後に再建されたものである。その中でも平成九年（一九九七年）に再建された仁王門は訪れた参拝者を驚かせる。設計は一心寺の長老でもある高口恭行氏。その後、境内隣接地に一心寺シアター倶楽を開設。宗教にこだわらない、かつての寺が持つていた文化的機能を提供している。

建築人 4
2014

監修	公益社団法人大阪府建築士会		
	建築情報委員会		
編集	建築情報委員会『建築人』編集部		
編集人代表	米井 寛		
編集人	荒木公樹	飯田英二	
	筑波幸一郎	中江 哲	
	橋本頼幸	牧野隆義	
事務局	山本茂樹	母倉政美	
	印刷	中和印刷紙器株式会社	

市内において、設計者むけ説明会を開催する予定です。説明会日時等の詳細は建築人5月号のインフォメーションに掲載します。

問合 大阪府住宅まちづくり部建築指導室
審査指導課
Tel.06-6210-9720

Others

その他のお知らせ

木造トラス勉強会

・4月の木造トラス勉強会
「木造の定義」
RC造・S造とは違う伝統の木造「軸組」についての定義から説明します。

日時 4月10日(木) 14:15～16:30
場所 SSDP GRACE -グレス-
大阪市西区土佐堀2-1-9
KOYAエスパシオ中・島 601号室

※5階から6階へは階段をご利用下さい。

費用 1,300円(会員は1,000円)+資料代

・6月の木造トラス勉強会
「継手の原理・伝統木造の基本1」
伝統木造の継手について、力の伝達方法と使い方など木造で設計する上で知っておくべき基本と構造理論。
プレカットとの違いと考察
軸組と継手の関係から伝統木造の構造の考察まで。

日時 6月12日(木) 14:15～16:30
場所 大阪木材仲買会館
大阪市西区南堀江4-18-10

費用 1,300円(会員は1,000円)+資料代

問合 木造トラス研究所 (株)合掌
原田 量治&栄 Tel.Fax.0742-36-2929
http://www.eonet.ne.jp/~truss/index.html

堺の懐かしい明治・大正・昭和戦前の建築の幻燈上映(2)」

旧浜寺町役場、旧大阪刑務所、旧御大典記念館、旧龍神遊郭、旧堺セルロイド会社、初代浜寺停車場、現在の浜寺公園駅舎、鈴木貴太郎生家跡他。ご自由にお越しください。

日時 4月19日(土) 11:00～
会場 堺市立東図書館(南海高野線北野田駅前)
講師 明治建築研究会 代表 柴田 正己
問合 明治建築研究会
Tel.072-236-3357

新入会員歓迎企画
見学会「利休と刃物のまち・堺探訪」
5/31 CPD6単位(予定)

千利休生誕の地、堺のまちを一日探訪します。伸庵・黄梅庵などの茶室を中心に、現存する歴史的建造物を訪ね「包丁」に代表される「ものづくりのまち」という側面に触れることで堺に残る歴史と文化をたどります。昼食は、堺名物の「あなご料理」を予定しています。

開催日 5月31日(土)9:30～16:00
集合 JR百舌鳥駅(受付9:15～)
案内 七堂元敏(堺市建築都市局開発調整部)
定員 40名
(申込先着順・入会半年以内の方優先)
参加費 会員4,000円 会員外5,000円
(昼食代及び施設入館・拝観料含む)

● 本会の催し参加問合・申込先
大阪府建築士会事務局
〒540-0012 大阪市中央区谷町3-1-17
高田屋大手前ビル5階
TEL.06-6947-1961 FAX.06-6943-7103
メール info@aba-osakafu.or.jp
HP http://www.aba-osakafu.or.jp/

Administration

行政からのお知らせ

「大阪市大規模建築物の建設計画における緑化協議の一部改正」

大阪市では、市内で一定規模以上の建築物を建設する際には、建設計画区域内にその面積の3%以上の緑地をまちなみの景観として接道部に効果的に設けていただくようお願いしています。

平成26年4月1日からは、市内により実感できる緑を創出していくことを目的に、緑地として確保していただく面積の一部を緑視面積(立面積)に置き換えることも選択できる制度になりました。詳細は以下のHPをご覧ください。

問合 大阪市建設局公園緑化部協働課
Tel.06-6469-3856
http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000009829.html

「近畿建築行政会議 建築基準法共通取扱い集」
(初版)発刊及び説明会のご案内

近畿府県の特定行政庁で構成する近畿建築行政会議総則部会では、建築基準法における近畿圏内の統一的運用を掲載した表記共通取扱い集を作成しました。5月下旬に大阪

会場 (株)内田洋行 会議室
(大阪エビキタス協創広場CANVAS)
大阪市中央区泉町2-2-2

内容
第一部(18:00～18:55)
「長期優良化リフォーム補助金活用方法」(耐震・省エネ診断ソフトの応用)～ホームズ君耐震診断Pro、ホームズ君省エネ診断を使って～
講師 (株)インテグラル営業企画部 マネージャー 木村良行
第二部(19:00～19:50)
小規模リフォームからリノベーション、共同住宅の入居率改善リフォームにまで役立つ3Dパース提案～住宅リフォームプレゼンテーションソフト「3D住宅リフォームデザイナー」を使った事例～
講師 メガソフト(株)広報室 西脇 功
参加費 会員1,500円 会員外2,000円
(ドリンク・フード付)
定員 100名(申込先着順)

新会員歓迎交流会
大阪府建築士会活動発表会
CORE2014
4/19 CPD3単位(予定)

建築士会では「建築士」として共に学び、スキルアップ、交流、情報交換、見学会、社会貢献、企画運営などさまざまな活動を行っています。新会員のみなさんも「建築士」の資格を活かし、建築士会の仲間となり一緒に活動しませんか? CORE2014では、(公社)大阪府建築士会の事業委員会、社会貢献委員会の事業内容を抜粋して、今年度の活動発表と展示会を行います。新しい人と人の出会い、役立つ情報がきっとみつかります。お気軽にご参加ください。

日程 4月19日(土)
会場 日建学院
大阪市北区鶴野町1-9
梅田ゲートタワー3F
時間 発表・展示会13:30～17:00
(受付13:00～)
新会員歓迎交流会17:30～19:30
参加費 500円(資料代)
新会員歓迎交流会4,000円
(当日入会申込者は無料)
申込締切 4月10日(木)
※新会員歓迎交流会の開催場所は、当日発表会会場にてお知らせいたします。
※新会員以外の方でもご参加いただけます。

大阪地域貢献活動センター
平成26年度 助成対象活動募集

建築士と地域住民等が連携して進めるまちづくりなどの地域貢献活動に対して、活動費の助成などを行います。

■募集期間 5月30日(金)まで
■対象とする活動
建築士と地域住民等で構成する団体が進める地域貢献活動が、地域住民等と連携して進める地域貢献活動で、原則として営利を目的としない活動。

■助成額 1件の助成額は30万円を限度
■問合先 本会・社会貢献委員会
※募集案内は4月号に同封しています。

二級建築士／設計製図
受験対策講習会
実力養成コース 7/13～9/7
直前対策コース 8/24～9/7
模擬テストⅠ・Ⅱ 8/3、9/7

有能で意識の高い建築士の養成を目標に、実務に直結した指導を行います。

■実力養成コース(全10回、模擬テスト2回含む)
日程 7/13(日)、7/20(日)、7/21(祝)、7/27(日)、8/3(日)、8/10(日)、8/17(日)、8/24(日)、8/31(日)、9/7(日)
時間 9:30～17:30
会場 大阪府建築健保会館
定員 35名(申込先着順)
受講料 建築士会会員110,000円、一般125,000円

■直前対策コース(全3回、模擬テスト1回含む)
日程 8/24(日)、8/31(日)、9/7(日)
時間 9:30～17:30
会場 大阪府建築健保会館
定員 15名(申込先着順)
受講料 建築士会会員35,000円、一般40,000円

■模擬テストⅠ・Ⅱ
日程 Ⅰ:8/3(日)、Ⅱ:9/7(日)
時間 9:30～17:30
会場 大阪府建築健保会館
定員 【各回】25名(申込先着順)
受講料 【各回】建築士会会員13,000円、一般15,000円

建築士の会やお・かしわら+建築士の会東大阪
「八尾市立八尾図書館及び八尾市立青少年センター見学会」
4/6 CPD2単位(予定)

八尾市の中央図書館の整備とあわせて、青少年センター・学習室・郷土及び地域の資料や情報提供の各機能を備えた、複合施設が市役所の前に完成しました。風や光を感じつつ読書ができる屋外読書テラスや、吹き抜けと一体となった壁面書架の「本の滝」を設けるなど、素敵な空間が出来上がりました。

日時 4月6日(日) 受付12:30～
見学13:00～15:00(予定)
集合場所 八尾市役所本館前ロータリー(西側玄関前)
参加費 1,000円(資料代等)
定員 30名(申込先着順)
※参加証は実施1週間前に出状予定です。

第42回賛助会員分科会セミナー
耐震・省エネ・バリアフリー、多様化するリフォーム市場に対応するためのPCソフト応用と長期優良化リフォーム補助金活用方法
4/11 CPD2単位

活況を呈しているリフォーム市場の現状と、それに対応するためのPCソフトの有効利用、また長期優良化リフォーム補助金の活用方法を、数々の事例とともにご紹介します。

日時 4月11日(金) 講義18:00～19:45
ミニ懇親会 19:50～20:30

■受付場所における受験申込
配布期間 3月10日(月)～4月14日(月)
(土曜日、日曜日、祝日は除く。4/12(土)、4/13(日)は受験申込書の受付を行う所定の受付会場に限って配布を行います。)
配布時間 9:30～17:00
(4/14(月)は9:30～16:00)
配布場所 大阪府建築士会内
大阪市中央区谷町3-1-17
高田屋大手前ビル5階
受付期間 4月10日(木)～4月14日(月)
(土、日を含む)
受付時間 10:00～17:00
受付場所 大阪府建築士会内
学科試験日 二級7月6日(日)
木造7月27日(日)
設計製図試験日 二級9月14日(日)
木造10月12日(日)

平成26年一級建築士試験案内

■受付場所における受験申込
配布期間 4月1日(火)～5月12日(月)
(土曜日、日曜日、祝日は除く。5/10(土)、5/11(日)は受験申込書の受付を行う所定の受付会場に限って配布を行います。)
配布時間 9:30～17:00
(5/12(月)は9:30～16:00)
配布場所 大阪府建築士会
大阪市中央区谷町3-1-17
高田屋大手前ビル5階
受付期間 5月8日(木)～5月12日(月)
(土、日を含む)
受付時間 10:00～17:00
受付場所 大阪府建築士会
学科試験日 7月27日(日)
設計製図試験日 10月12日(日)
※インターネット又は郵送による受験申込を含め、建築技術教育普及センターのホームページで情報提供しています。
http://www.jaeic.or.jp/

平成26年度 建築士定期講習
5/31、7/17 CPD各6単位

建築士事務所に所属の一級・二級・木造建築士で、平成23年度に本講習を受講された方が対象です。尚、平成23年度以前に建築士試験に合格し本講習を未受講の方は、平成26年度中に必ず受講してください。

■日時・会場
5/31(土) 9:30～17:30
大阪国際会議場、定員600名
会場コード5C-01
7/17(木) 9:40～17:30
大阪国際交流センター、定員300名
会場コード5C-51

■申込締切日
5/31(土)開催分:4/30(水)申込書必着
7/17(木)開催分:6/20(金)申込書必着
※大阪での申込受付は簡易書留での郵送のみです。
※定員に達し次第、受付を終了します。

■受講料 12,960円(消費税含)
■申込書配布・受付場所
大阪府建築士会事務局
大阪府建築士事務所協会事務局

INFORMATION については本会ホームページにも掲載されています。
本会ホームページから予約することも可能です。【詳細は大阪府建築士会 ホームページ】<http://www.aba-osakafu.or.jp/> まで

Sponsorship

建築士会からのお知らせ

国土交通省の登録を受けた登録資格者講習と同等以上の内容を有すると国土交通大臣が認める講習の認定について

本会が過去に実施した木造及び非木造の耐震診断・改修講習会が、「建築物の耐震改修の促進に関する法律」に定める同等以上の資格者講習会として、平成26年2月10日に国土交通大臣の認定を受けました。

■認定された本会主催の講習会名及び開催年度

- ・既存木造住宅の耐震診断・改修講習会／平成24年度及び平成25年度
- ・既存鉄骨造建築物の耐震診断・改修指針講習会／平成8年度～平成25年度
- ・既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断・改修指針講習会／平成7年度～平成25年度

※詳細につきましては、本会ホームページをご覧ください。

本会における既存建築物耐震診断等評価業務のご案内
～平成26年1月より耐震評価業務を開始～

本会では、「建築物の耐震改修の促進に関する法律」の改正に伴い、建築構造の専門家で構成する「建築物耐震評価委員会」を組織し、平成26年1月より建築物耐震評価業務を実施しております。

公立学校施設や沿道建築物などの耐震不適格建築物について、申込者が検討した建築物の耐震診断及び耐震補強計画について、専門的観点のもとに審査・審議を行い、妥当であると認める申込案件に対して評価書を交付します。スピーディな審査を心掛けますのでどうぞご利用ください。

なお、本会は平成26年2月18日付けで、(一財)日本建築防災協会の「既存建築物耐震診断・改修等推進全国ネットワーク委員会」に入会するとともに、当委員会の耐震判定委員会に新規登録しました。

<http://www.kenchiku-bosai.or.jp/nw/>
(業務内容)

耐震診断報告書の審査、評価
耐震補強計画案の審査、評価 等
(対象建築物)
公共・民間等の建築種別、用途、規模、構造種別は問いません。また、他府県の建築物も対象としております。
(会員特典)
申込者又は診断等実施者が本会会員の場合は、評価手数料の割引があります。
詳細につきましては、本会ホームページをご覧ください。

平成26年二級、木造建築士試験案内

大阪府建築士会は運営委員会を筆頭に六つの委員会で構成されています。それぞれが役割と責任を持って精力的に活動しておりますが、今月よりこのコーナーにて各委員会の具体的な活動報告を行っていききたいと思います。

トップバッターは建築士会の情報の要、建築情報委員会です。当委員会は総勢十八名で『建築人』や『ホームページ』、『フェイスブック』、『メールマガジン』、『建築材料・設備機器メーカーリスト』を編集・製作、発行しています。『建築人』を担当する「紙のチーム」とその他を担当する「WE Bのチーム」に分

かれ、それぞれが横の連携を取りながら最新の情報収集・提供に努めております。

『建築人』は新創刊から今月四月号で早三年目を迎えることになりました。毎月の編集会議にて多くの議論や検討を行い、取材や撮影、原稿執筆、校正を繰り返し、日々メ切に追われながら発刊を続けています。皆様からのリアクションはとても励みになりますので、また読後の感想など頂けると幸いです。

今年度はさらに皆様に情報と人材の



提供をお願いしたいと思えます。情報委員会なのに他委員会の最新情報を知らない、なんて笑えない状況が時々あります。情報には足で稼げ！なんて冷たい事を言わないで、積極的な情報提供をお待

ちしております。また、このような活動にご興味のある方は是非ともご一報ください。日常では減多に接することのない出来事に関われ、なかなか刺激的ですよ。

メールマガジンでもコメントしましたが、当会の情報ツールはここ数年でかなり充実してまいりました。これからは皆さんがこれをどう活用するかです。我々情報委員会をうまく使って、建築士会のBRAND向上にともに努めてまいりましょう。

(写真は毎月の編集会議、ではなく新年度企画に向けての温泉合宿風景です)

● 今月の委員会だより ●
建築情報委員会から

東畑謙三



建築そのものではなく、建築に関わる人に焦点をあて掲載する「建築人（けんちくびと）」。人の持つ魅力は、職域を超えても理解しあえると考えます。創作の源泉や姿勢、人生哲学、ライフスタイルなどを垣間見ること、共感できる気づきを得ることを期待しています。

第九回目は、「東畑謙三と東畑建築事務所」に焦点をあてます。創始者の個性が色濃いアトリエ型事務所から徐々に組織化することが多い大規模設計事務所において、当初から自らをオーケストラのコンダクターとなぞらえ、社会に貢献し組織をコンダクトしてきた建築家・東畑謙三に迫り、その組織が向かう先、そして支える『人』に焦点をあてるため、元大阪事務所長の岡田聿之さんと現大阪事務所長の米井寛さんにお話を伺いました。

とうはたけんぞう

1902年 三重県生まれ

1926年 京都大学工学部建築学科卒業

1929年 外務省嘱託として東方文化学院京都研究所設計に携わる

1932年 欧米建築視察

1932年 東畑謙三建築事務所開設

1951年 組織変更により株式会社東畑建築事務所を開設、代表

取締役役に就任

1982年 取締役会長に就任

1989年 紺綬褒賞受賞

1997年 取締役名誉会長に就任

1998年 永眠（享年97歳）

東畑建築事務所の「工場建築」

荒木 戦前の工場が劣悪な環境だった時代、働く人たちが合理的に働けるように配慮されていたそうですね。

岡田 紡績工場では、くみ取り便所が当たり前だった時代に社員寮にも水洗便所を採用していました。衛生上非常にグレードが高いものだったと思われます。荒木 紡績工場にペアガラスが使われていて驚きました。

岡田 今なら当たり前の製品ですが、当時のレベルからすると新しい技術だったでしょうね。その他に工場建築の新しい技術としては、それまでの大規模な紡績工場で採用されていたトラス構造から、単材のH型鋼を提案したことでした。トラス構造では糸くずが複雑なトラスの鉄骨にたまりやすく、掃除をするのも困難でした。時には粉塵爆発を起こす危険性が高かったのですが、単材のH型鋼でつくることで表面積が少なくなり、粉塵がたまったも除去するのが簡単になりました。昭和一〇年代初めのころだと推測されますが、建築の設計者が手掛けた工場は違うと紡績工場のオーナーたちに知っていただけたようです。それらの技術が、東畑建築事務所を紡績工場の設計において第一人者に押し上げました。

荒木 技術に裏打ちされた新しいものを造り続けたことで事務所が発展したよう

森本 今回の建築人では、「東畑謙三と東畑建築事務所」に焦点をあて、元大阪事務所長の岡田聿之さんと現大阪事務所長の米井寛さんにお話を伺います。

岡田 東畑謙三さんの若かりし頃のことを深くは知らないのですが、私を知り得たことと先輩にお聞きした話などを交えてお話しさせてもらいます。生前に自分のことを決して「先生」とは呼ばさなかったので、このインタビューでも東畑さんと呼ばせてもらいます。

生い立ち／東畑四兄弟

岡田 東畑さんは、一九〇二年（明治三五年）四人兄弟の三男として三重県で生まれました。一番上のお兄さんが精一さんで東京大学名誉教授であり著名な農業経済学者です。

森本 三重県の嬉野に東畑さんによる設計で東畑精一さんの記念館（東畑記念館）があり見学に行ったことがあります。当時、地元では東畑四兄弟（注1）を知らない人はいなかったと聞いています。

「空間」「構成」は東畑謙三から生まれた？

岡田 東畑さんは京都帝国大学を卒業し、大学院では武田五一（注2）に師事し、有名な「東方文化学院京都研究所（注3）」を設計しています。その頃はアー・ヌーヴォーやユーゲント・シュタイ

ルから次の時代に入り、モダニズムが登場した頃です。オランダに「デ・ステイル」というグループがあつて、そこで活動していた理論家のT・V・ドゥースブルフ（注4）の著書『新しい造形美術の基礎概念』という建築の構成論を述べた本の翻訳を、東畑さんが手掛けられています。訳された文中に「空間」や「構成」という言葉が出てくるのですが、それを最初に言葉に訳したのが東畑さんだったそうです。

荒木 初めて知りました。

岡田 今の建築家が何かにつけて使う非常に便利な言葉ですが、そもそも「空間」と「構成」というのは京都学派の哲学者であり東畑さんの義兄でもある三木清（注5）の助言を得て訳したものであったとのこと。しかし三木氏から、建築論にのめり込まず、「工学技術に沿った実践」である本当の建築を造るほうが大事だと論され、建築家の道を進んだそうです。ただ東畑さんも学者の血筋ですので、本当は大学に残りたかったのではないかという話もありますね。

産業社会と組織の展開

岡田 東畑建築事務所は、東畑さんが戦前の一九三三年（昭和七年）に創業し、当時は一〇人足らずの個人事務所でした。岩井商店（現Ⅱ双日）の創始者であつ

上段 青年時代の東畑謙三（提供：東畑建築事務所）
中段 東方文化学院京都研究所写真・資料提供 東畑建築事務所
撮影 中段：田籐哲也

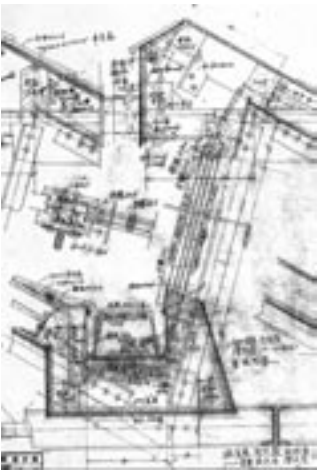
注1 東畑四兄弟 長兄は文化勲章を受章した農政学者で東京大学教授を務めた東畑精一（1899～1983）。次兄速水敬二も京都大学で哲学を修めた学者。弟東畑四郎は、東京大学法学部出身で農林事務次官を務めた。

注2 武田五一（1872～1938）建築家 東京帝国大学卒業後、同大学助教授、京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）教授を経て京都帝国大学建築学科を設立。「関西建築界の父」とも呼ばれる立役者。雑誌「新建築」の創刊にも関わる。

注3 東方文化学院京都研究所（現京都大学人文科学研究所東アジア人文情報学研究センター）武田五一の下で東畑謙三が設計した初めての作品。研究所の美術専門家浜田耕作教授の示唆によりロマネスクの雰囲気を出す建築となる。

注4 T・V・ドゥースブルフ(1883～1931) 画家・建築家・美術家 デ・スティルを結成。新造形主義・抽象絵画の普及に努める。著書に『新しい造形芸術の基礎概念』

注5 三木 清 (1897～1945) 京都学派を代表する哲学者の一人。京都帝国大学で西田幾多郎に師事。著書に「哲学入門」「人生論ノート」他。



上段 上：呉羽紡績庄川工場
下：H型鋼による骨組
中段 ペアガラスを用いたハイサイドライト断面図（中央毛糸紡績四日市工場）
下段 「待てしばしはない」
写真・資料提供 東畑建築事務所

ですが、同時期の他の設計事務所との違い、特色というのは出ていたのでしょうか？

岡田 戦時中は現在のように様々な用途の建築が同時期にある時代ではなく、技術力の必要な建物が大半でした。だから、当時は技術力の切磋琢磨があり、鋼材が不足する時代に戦闘機の格納庫を三〇メートルスパンの木造トラスで造ったりしていました。それが戦後の技術の蓄えになったと思いますね。

組織の先駆け／構成技師

岡田 当時、個人名が付いた事務所の創業者を大抵は「先生」と呼んでいたのですが、「私はオーケストラのコンダクターみたいなものだ」とよく仰っていました。オーケストラの構成員は各楽器の専門家であり、その楽器に関してはコンダクター以上の技量を持っています。東畑さんは「私はこれをコンダクトして、より高次の意味で私のカラーを発揮し、建築を構成するのだ」と自分以上の技量を持つ者達をまとめることが役目だと捉えられていたようです。教えるのではなくコンダクトすることが役割なので「先生」とは呼ばさなかったんですね。

森本 組織的な視点を早くから持っていたのでですね。

岡田 「先生」とは呼ばせないことには、

にお会いしたことはありませんでしたが、オーナー存命時に入社した最後の年代だと感じたことを今でも覚えています。米井 東畑さんが亡くなられた後、ゆかりのある所員が書いた追悼文をまとめ、社内誌の特集号（注6）として発行したものがあります。

待てしばしはない

中澤 「待てしばしはない」（注7）とは、東畑さんがよく言われていた言葉ですか。岡田 私は直接聞いたことがありませんが、東畑さんはせっかちだったのでしょう。「はよ決めろ」と。だから「待てしばし」はないんじゃないですか。また「最高の技術者たる者は時間がない」と言い訳をしない。一日しか時間がないなら、一日でやる。一時間しかなければ、一時間で仕上げる方法を考えるのが最高の技術者である」と頭の痛い名言もあります。

東畑謙三の多面性

森本 東畑さんは、設計以外にも不動産事業やプレハブ事業などもされています。岡田 我が社の不動産部門で清林社というのがあります。要は、本格的な事業でなく設計業務を手助けするための組織という位置付けです。現役所員のときに株を購入させて、その資金で不動産運用を行い、退職した時に年金的に使えるよう



もう一つ理由があり、駆け出しの若い所員が「先生」とおだてられて間違った取引に応じることを避けるため、自分たちは「先生」ではないのだということを教えるという意味もあったようです。倫理に厳しく、利害関係者との付き合いを禁止しておられました。だから、所員は現場の休憩中に一杯のコーヒーを勧められても、「先生に破門される」と辞退していました。

森本 徹底されていますね。

岡田 東畑さんは建築家や芸術家というのは、周囲の人が評価して付ける名前であり、本人がそのような気持ちでやるものではないと考えられていたようです。自分自身のことを建築家というよりも、実際の具体的なモノを構成する技師である、とよく仰っていました。建築をさまざまな要素に分解し、それぞれに求められる機能に応えつつ合理的な立体として構成することが大事だということでしょう。

自発的な成長を促す教え

森本 東畑さんから具体的に設計や製図についての教えはあったのでしょうか。岡田 あまりなかったですね。建築の設計というのは、自分で勉強するものであり、人から教えてもらうものではないのだと。自発的な成長を促し、自分の考え

に考えられました。当時としては、珍しかったですね。

米井 不二建設というゼネコンもつくったんですね。

岡田 終戦直後のことで設計だけでやっけていても仕事がない時代。だから、施工部門をつくり、設計業務の手助けをしようという発想だと思います。戦時中使っていたプレファブ方式を応用したパネル式の住宅を供給し、戦災復興に寄与していたようです。ただ戦後の状況が落ち着くと、やはり東畑さんは設計がしたいとのことで、完全に手を引いてしまいました。

森本 建築家という一つの断面だけでは語れない魅力を感じます。

米井 社員を養うために考えたというのもあるだろうし、事業家的な野心もあったのかもしれないですね。

森本 その他にも、様々な公職を歴任され、大阪万博では、建設顧問・会場計画委員として調整されたとのこと。表には出てこないところで大きな影響力があったようです。

岡田 設計事務所だけでなく、広く建設業界の懸案事項も東畑さんの一言で治まったということもあるらしいです。会社以外での社会への貢献も大きく、利害関係の立場ではなく、公平にもの言える人ということ、説得力があったん

る範囲において他人よりも一歩先に進むことを説かれていました。力量を見抜くことについては目が利き、若い所員にも「君、担当だ。やってみる」と仕事を任せられていました。東畑さんの大きな傘の庇護の下に自由にやらせるという雰囲気があったようです。ただし、その傘から飛び出すと、爆弾が落ちたらしいのですがね。今の東畑建築事務所にもその伝統は残されていて「責任は持つからとにかくやってみる」という自由な雰囲気がありますね。

槍持ちの雪隠（せっちん）

岡田 東畑さんも年齢とともに実務には携わられなくなりました。時折、設計室に上がってこられ、何をやっているのかという感じで見回られていましたが、図面について細かな指示は出されず、気になる部分をさりげなく指摘されていました。

森本 たとえばどんなものでしょう。

岡田 細長いおかしなプランを描いていると「これは鰻の寝床やな」、無駄に大きなスペースをつくっているとか「槍持ちの雪隠（せっちん）やな」など、そういう例え話に引っかけ。ちよっとスケールアウトしている図面を見かけるとそういう例え話を持ち出して、おかしいということを指摘されていました。

森本 そのほかにはありますか。

じゃないですか。

北 また東畑さんは、趣味でたくさんのお古書籍や中国陶器を集められていたようです。

岡田 事務所内に「清林文庫（注8）」というのがあります。東畑さんが、建築はもとより広い分野にわたって収集された希少価値の高い書物のコレクションです。七年前に武庫川女子大学で展覧会を行いました。

米井 これらは会社所有になっていますが、かなり貴重な古書です。

岡田 例えば空間にオブジェを置かないといけない場合など、経験がないから四苦八苦していると、東畑さんが「清林文庫」から参考になるものを持ってきたりはしました。ただし、実務に直接関与する本ではなかったですね。

駆け出しの頃

荒木 岡田さんが担当された、「大阪市立環境科学研究所（一九七四年）」についてお話しください。

岡田 大阪市の設計委託を受けた建築で、東西面に長く、直射日光を遮蔽し受熱量を軽減するためブリーズソレイユに加えて、内側に小さなアルミルーバーも設置しています。まだ駆け出しだった私の計画案を、東畑さんが受け入れられて実現した非常に印象に残る建物です。今



岡田 「ワイシャツは袖口からほんの少し白いのが出ているのが気品あり、あまり出し過ぎてはいけないし、ワイシャツの袖が出ていないのもおかしい」「人間の手はピン角を造らない」「ナマズをのせるには丸い皿。四角い豆腐の上にはのらない」など。そういう言い方でヒントを与えていたんでしょう。

森本 直接的でないだけに逆に心に残りますね。

岡田 中には「魚は頭から腐る」と組織の在り方についても。設計だけでなく経営倫理まで具体的な指摘をせずに、エビグラムのように言われていました。

米井 私が入社したときはまだご健在で、ちょうど祖父と同じくらいの年でした。だから孫の顔を見にきたかのようにでした。「ビタミンを取りに来た」とか言いながらね。

岡田 東畑さんは一九九八年（平成一〇年）に亡くなりましたが、実際に仕事上での接点があったのは米井君の世代までで、それより後の人たちはほとんどありませんでした。

中澤 事務所には何年頃まで来られていましたか？

米井 確か一九九〇年代前半までですね。森本 ちなみに私が東畑建築事務所に入社したのは一九九八年四月。その年の四月二十九日に東畑さんが亡くなられたため

でいう省エネ環境配慮型の建築ですが、コンセプトに間違いがなければ若い人にもやらせてみようというのは、今でも残る伝統なのかもしれないですね。

荒木 環状線に乗っていたら、ランドマーク的に見える建物ですね。

岡田 当時、丹下健三さんの「旧電通大阪支社」や、坂倉準三さんの「塩野義製薬中央研究所」と言ったブリーズソレイユの建物が発表された頃でした。そのとき私の心境としては、「一度はコルビジエみたいなものを」というのがあったのですが（笑）、全く同じにするわけにはいかないのが、アメリカのSOMのルーバーの使い方も参考にしました。

荒木 米井さんは、「千里ライフサイエンスセンター（一九九二年）」に携わったと伺いました。

米井 当時は、創業者が厳しく目を光らせていた時代から代が替わった頃だったんですが、所員は、結構自由にやらせてもらっていた印象があります。その後、設計品質ということが厳しくチェックされるようになってきました。そういう状況だったので、設計するからには形を残したい、風景を創りたいという心意気が、設計者としてありました。いくつもの案の中から最終的にはやわらかいフォルムが選ばれましたが、ニュータウンのなだらかな風景に、自分たちがデザイン

上段 2007年11月に武庫川女子大学「甲子園会館」で開催された「清林文庫」展
下段 大阪市立環境科学研究所 千里ライフサイエンスセンター
写真・資料提供 東畑建築事務所
撮影 下段：荒木公樹

注6 GJ Jul98 vol.12（1998年7月発行）
注7 布野修司監修「待てしばしはない」東畑謙三の光跡 日刊建設通信新聞社（1999年）
注8 美術、工芸、建築、考古学、文化史の諸分野にわたる古書を中心とした15,000冊を超えるコレクション。このうち、建築書はおよそ1,500冊で全体の約一割を占める。ウィトルウィウス「建築十書」イタリア語版初版やスカモッツィ「世界建築の思想」初版等がある。



上段 真庭市庁舎
中段 真庭市役所前バス待合所
下段 「建築と社会」2013年1月号「U-35のまなざし」
写真・資料提供 東畑建築事務所

東畑建築事務所では真庭市に本社をおく木質加工会社など地元企業協力のもと、「地産地消」を一命題に掲げた設計に取り組んでいる。「真庭市役所本庁舎（2011年竣工）」では、内外装や家具・照明器具にいたるまで真庭産木材を活用し木質豊かなインテリアとなっている。「真庭市役所前バス待合所（2014年竣工）」では、CLT（Cross Laminated Timber）材独特の断面を現しとし、日本初のCLTを体感できる建築物となっている。

したランドマークというか、スカイラインをつくりたいという思いがありました。もっとも、僕はまだ若かったので、上の人たちとのチーム全体の共同作業でつくったシルエットだし、予算に納めるために全面カーテンウォールの案が現在のタイル仕上げになったという経緯もありました。

東畑建築事務所の今

荒木 今、東畑建築事務所は、所員が何名いらっしやいますか。

米井 全体で、正社員は二八〇名くらいですね。そのうち大阪に半分近くいます。大阪以外には東京、名古屋、九州に事務所があります。大阪が発祥でも東京へ拠点を移す会社がありますが、今となっては大阪に拠点があるというのはユニークでいいかなと思いますね。

奥河 組織事務所やゼネコン設計部には標準ディテール集などがあるようですが、こちらにもあり、それは東畑さんの特色が出たものなのでしょうか？

岡田 標準図というのは、個人の好みや癖が入っているものではなく、当たり前なことを間違いないように基礎的なものを図面化したものです。口では伝えにくいことも図面を見ればすぐ分かるようにね。だから、どこの会社のものも概ね同じようなものだと思いますね。

中澤 それを各担当者が工夫して、アレンジしていくという形なんですね。

岡田 そうですね。

中澤 標準図を、個別の物件ごとにアレンジして使ったときに不具合が出る場合があると思います。その場合、現場での対処方法などをどのように設計の部署へ伝達されていますか。

米井 システム上は、フィードバックシートを書き、全員で共有するというようにしています。しかし、自分が体験しないと分からないと考え、設計担当者にできるだけ監理をさせています。当社には「監理部」という監理専門の部署もありますが、そこでは配筋検査など、設計図が確実に施工されているかを確認しています。一方で、設計者の立場で監理をするということを推奨していて、若いうちに一回は常駐監理にも行かせてやりたいと考えています。

中澤 一つの物件を設計から監理まですることが一番の経験になりますよね。

米井 作図手段が手書きからCADに変わり、他の物件のディテールをコピーして使うことが容易になるとともに、そのディテールでどこかで事故が起きててもその情報が伝わっていなければ再度同じ間違いを起してしまう危険性も高まっています。だから、フィードバックを確実に行うことが必要だと感じています。

エコ改修事業への展開

河野 改修分野で何か取り組まれていることはありますか？

米井 二〇〇四年に環境計画室という部署をつくりました。それまで環境といえは省エネなど設備だけで対処することが多かったのですが、環境計画室は、建築と設備を横断的に取り扱います。そこでターゲットにした一つが学校のエコ改修です。環境省の補助事業で「学校エコ改修と環境教育事業」というものがあるのですが、全国のモデル事業の内の三割近くを受注しました。

河野 環境に対してユーザーに興味をもってもらう取り組みもされているようですね。

米井 この事業では、単なる省エネ改修だけでなく、環境学習にも力をいれています。教職員や地域の方を対象に改修設計の課題についてのワークショップを行ったり、子どもたちに工事現場を見学してもらったり、出来上がってから効果のモニタリングもしています。単なる耐震改修だけではなく、そういう一連のエコ改修事業の実績は積み重なってきていますね。

中澤 環境学習とはどのようなことですか？

米井 例えば、子どもたちにエコ改修のしくみをクイズ形式で教えたり、完成し

てから、風船を使って室内の風通しの効果を実感してもらったりしています。楽しみながら学べるように工夫すると、子どもたちはすぐ関心を持ってくれるのですよ。

共感する建築

牧野 創立八〇周年の作品集（注9）を米井さんから送っていただきました。巻頭で「共感する建築」という文章があります。

米井 私が書かせて頂きましたが、「施主との間の共感」、「社員同士の共感」、それから当然、現場に出れば「施工者との共感」というふうに、向かうべき目的を理解して、お互いに共感しながら進めていくということが非常に重要だという話に至りました。具体的なプロジェクト紹介は、どういうプロセスでこの建物が出来上がったか、わかってもらえるような紙面を意図したデザインとしました。

若手の勢い

牧野 「建築と社会」でも特集（注10）が組まれています。

米井 同時期に二つ雑誌に特集を出すことになったので、編集方針を大きく変えることになり、これは広瀬君たち若手が中心になって編集してもらいました。広瀬 表紙タイトル「U-35のまなざし」



寧楽美術館



撮影：母倉知樹



大阪市立大学理系学舎



撮影：時空アート



上段 岡田聿之氏
中段 米井寛氏
撮影 上段・中段：田龍哲也

岡田聿之
1937年 大阪府生まれ
1961年 大阪市立大学工学部建築学科卒業
1961年 株式会社東畑建築事務所入社
2011年 同社退職

米井 寛
1959年 岡山県生まれ
1984年 大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻修了
1984年 株式会社東畑建築事務所入社
現在 同社取締役常務執行役員大阪事務所長

聞き手
森本雅史、広瀬和也、中澤博史、北聖志、河野学、奥河歩美、牧野隆義、荒木公樹（責任編集人）

注9 「近代建築」2013年1月号特集 東畑建築事務所創立80周年
注10 「建築と社会」2013年1月号 東畑建築事務所創立80周年特集「U-35のまなざし」
注11 岡田孝男（1898～1992）建築家 1925年京都帝国大学卒業。在学中武田五一に師事。茶室研究の第一人者であり帝塚山学院大学教授を務める。著書に「茶室平面集」学芸出版社など。
注12 藤井厚二（1888-1938）建築家 1913年東京帝国大学卒業。竹中工務店に就職後、京都帝国大学教授に就任。環境工学への関心が高く「聴竹居」は、近代住宅建築の名作として名高い。
注13 浦辺鎮太郎が「あらゆる点で『モデスト』である東畑建築事務所」と題した記事を「建築と社会」にて寄稿。

だろう。」とか言って却下したんです。

広瀬 中身もそういうモチーフでレイアウトも考えていたのに、一気に崩されて（笑）

森本 私が在籍した時に始めた、若手の勉強会のレポートもありました。二〇回を数えるまで続いているようであれしいです。勢いを感じますね。

米井 元気のよい若手が増えてきたので、おもしろくなってきましたね。

東畑謙三から引き継がれたもの
森本 最後に、東畑謙三イズムを引き継いでいると感じる部分とこれからについてお話しください。

米井 東畑さんは、例えば村野藤吾さんのような建築家が手掛ける建物を美術建築と呼び、一方、自分たちの建物は産業建築だというふうに理解していたように思います。建築思潮をリードする建築表現とは一線を画し、クライアントの利益を最大化できるような技術に裏付けされた設計を目指していたのではないでしょう。設計は個人の表現ではありませんが、建築主を大切にする姿勢や清新な技術を優位に置こうとする気風は今の事務所にも受け継がれているのではないかと思います。岡田さんのような先輩方が事務所からおられなくなりましたが、かつての進取の気概のようなものを忘れずに持ち

岡田 「元気のいい事務所に頼みたいな」というのと、「これは、ちょっと怖いな」というのとの瀬戸際だな（笑）。荒木 でも、楽しそうですね。

米井 タイトルは「U35のまなざし」となっていますが、最初、若手が考えて来たタイトルは「東畑の芽」だったかな。「おまえたち、芽か。もっとたくましい

続けたいと思っています。また、今回のインタビュウでは、組織以外で仕事をされている方も多く、改めて弊社を捉え直す機会となりました。ありがとうございます。

インタビュウを終えて

岡田さんの父親は茶室研究の権威でもある岡田孝男氏（注11）であり、京都帝国大学時代に東畑謙三氏と親交があった。当時教授だった武田五一博士は、建築設計の依頼がくると教育的な観点もあり大学に在籍する学生から助手を探したようだ。東畑氏は京大の東方文化学院京都研究所を完成後、武田博士の元を離れたが、岡田孝男氏は、大学に席を置き武田博士の私設助手的存在であった。当時の写真を拝見すると、藤井厚二教授（注12）も一緒に写っていたのが印象的だった。

また岡田さんは幼少の頃、東畑氏と会っており入社後「おまえのところ行つて、セミ、採つてやった」と言われたと笑う。「一〇人会」という会だったようだが、卒業年次が異なっても気の合う人たち一〇人が集まって、持ち回つてそれぞれの自宅で集まりをやっていたようだ。

そして岡田さんはその後、東畑建築事務所の門をたたく。「東畑さん everything 知らず、こちらでも知らないつもりで面接を受けたのだけ後で、『おまえ、あのときの小僧か』って言われてねえ」と懐かしそうに笑う。「岡田さん、なぜ東畑建築事務所に勤めようと思ったんですか」と聞いてみた。「当時、激動の時代にあつて『モデスト』（注13）すなわち中庸な事務所はかえつてユニークだった」とのこと。しかし「たしかに美術建築への憧れもあった（笑）」とも一言。美術建築と産業建築の両極が選択肢としてあつたことに時代性を感じた。

岡田さんの自邸には事務所を辞めた後も何度か邪魔させてもらっている。さりげなく出てくる武田博士がつくつたといわれる茶碗や掛軸。本棚には貴重な書籍が並び、奥には茶室がある。建築の世界と趣味の世界を両立していた東畑謙三氏と同じように、岡田さんもその遺伝子を引き継いで組織の中にいながらも、仕事の枠にとどまらない人生や生活の豊かさとは何かを教えてくれたことを、今回のインタビュウで改めて感じることができた。（森本雅史）

二〇一四年二月一八日

東畑建築事務所大阪事務所にて

東畑謙三・東畑建築事務所年譜

	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010
社会	1932　五・一五事件 1933　日本が国際連盟を脱退、大阪市営地下鉄御堂筋線梅田－心斎橋間開通（日本初の地下鉄） 1936　二・二六事件 1937　日中戦争始まる 1939　第二次世界大戦	1940　日独伊三国同盟 1941　日本対米英宣戦布告 1943　学徒出陣 1945　広島・長崎に原爆投下、第二次世界大戦終結 1947　日本国憲法施行 1949　湯川秀樹 ノーベル物理学賞	1951　サンフランシスコ講和会議、日米安全保障条約 1954　三種の神器（冷蔵庫・洗濯機・掃除機）ブーム 1955　尺貫法廃止メートル法統一 1958　東京タワー完成 1959　伊勢湾台風	1960　カラーテレビ放送開始 1963　テレビ衛星中継、ケネディ大統領暗殺事件 1964　東京オリンピック 1966　日本の人口1億人突破 1967　非核三原則 1969　アポロ11号月面着陸成功	1970　日本万国博覧会開幕 1972　沖縄返還 1973　オイルショック 1975　ベトナム戦争終結 1976　ロッキード事件 1978　新東京国際空港開港 1979　東京サミット	1980　イラン・イラク戦争勃発 1982　東北新幹線開通 1985　日航機123便御巣鷹山墜落 1986　チェルノブイリ事故 1988　青函トンネル、瀬戸大橋開通 1989　昭和天皇崩御、ベルリンの壁崩壊	1990　バブル経済 1991　湾岸戦争勃発、ソビエト連邦崩壊 1995　阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件 1997　地球温暖化防止京都会議京都議定書（COP3）採択	2001　アメリカ同時多発テロ事件 2004　スマトラ島沖地震 2005　構造計算書偽装問題 2007　米でサブプライムローン問題が浮上 2009　民主党大勝利で政権交代	2010　小惑星探査機「はやぶさ」帰還 2011　東日本大震災福島原子力発電所事故 2012　山中伸弥ノーベル医学・生理学賞
	1933　ブルーノ・タウト来日 1935　磨き板ガラスの製造開始 1936　『建築雑誌』発刊 1938　商工省築造工作物の鉄鋼使用を全面的に禁止、東京オリンピック大会中止、	1941　住宅営団設立 1942　アルバート・カーン 没 1945　前川國男「プレモス住宅」（木造組立住宅） 1947　浜口隆一「ヒューマニズムの建築」 1949　建設省発足	1950　建築基準法・建築士法公布、住宅金融公庫発足、日本工業規格（JIS）制定 1951　公営住宅法公布 1955　日本住宅公団発足、ル・コルブジエ来日 1956　日本建築家協会結成	1960　世界デザイン会議、「メタポリズム・グループ」結成、前川國男「京都会館」 1962　第1次マンションブーム 1964　千里ニュータウン 1967　フランク・ロイド・ライト設計「帝国ホテル」取り壊し 1968　都市計画法公布	1971　環境庁設置 1972　労働安全衛生法公布 1974　国土利用計画法公布、国土庁発足 1977　建築家賠償責任保険制度新発足	1981　新耐震基準公布、住宅・都市整備公団発足 1982　建設業許可業者数50万突破 1984　村野藤吾 没、建築士法改正 1986　前川國男 没 1987　新日本建築家協会設立	1990　一般公共事業外国企業の参入本格化 1996　耐震改修促進法施行 1998　建築基準法抜本改正（建築確認・検査の厳格化、指定確認検査機関の業務の適正化、建築士等の業務の適正化及び罰則の強化、他）導入他）	2000　住宅品質確保促進法施行 2004　景観法公布 2007　建築基準法一部改正（建築確認・検査の厳格化、指定確認検査機関の業務の適正化、建築士等の業務の適正化及び罰則の強化、他）導入他）	2012　東京スカイツリー
作品	1933　東亜紡織楠工場 東畑謙三建築事務所作品第一号。産業建築で高い評価を受ける基礎となった 1933　中央毛糸紡績四日市工場、関西ペイント東京工場 1934　日本生命神戸支店、渡辺栄一商店築港工場倉庫、徳山鉄板帯鉄工場 1935　長岡禪塾	1940　呉羽化成錦工場、徳山曹達電解工場 1941　呉羽紡績鈴鹿工場、呉羽紡績庄川工場、国産電機大岡工場 1942　台湾紡績王田工場原料精錬工場、福助足袋青年学校・寄宿舎 1943　国産電機小田原工場、徳山鉄板労務者住宅 1944　呉羽航空機整備工場、三興北ボルネオ工場 1945　呉羽ゴム工業津工場	1950　神戸博覧会外国館 戦災復興間もない時期に開催された大博覧会の外国館。木構造ながら50m×25m、高さ15m、スパン10mを実現している  1951　伊藤忠名古屋支店 1952　三重県立博物館、富士フィルム大阪支店、センイビル 1953　伊勢会館、甲南高等学校 1954　鈴鹿市庁舎 1955　大和銀行堂島支店、三重いすゞ自動車本社、三重会館 1956　富士フィルム足柄研究所	1960　蒔山竜泉堂、大阪府立大学図書館、神戸銀行尼崎支店 1961　美津野東京支店増築、大阪府千里丘共同住宅、大阪清掃局住吉工場 1962　三重県庁舎 1963　大阪府農林技術センター 1964　徳島市民病院、大阪市清掃局八尾工場、富士フィルム中央研究所 1965　日本生命静岡ビル、甲南大学体育館、徳島空港ビル、大阪市工業技術試験所 1965　日本住宅公団千里E住区高層団地 1970年に日本で初めて開催される国際万国博覧会を控えた千里地区に、公団住宅の新しい試みとして計画された郊外型高層住宅  1966　大阪市清掃局森之宮工場、三重県立志摩病院、京都府農協会館	1970　大阪駅前市街地改造事業第1棟 戦後の闇市の名残を呈する大阪駅前の市街地再開発計画。再開発手法のまだ確立していない時代にあって、暗中模索のなかから行政と一体となり市街地改造法を生みだし適用した第1号作品。  1971　神戸銀行三田支店、兵庫駅前市街地住宅、新日鐵君津製鉄所、新日鐵広畑製鉄所、新日鐵名古屋製鉄所 1972　兵庫県信連舞子独身寮、富士ゼロックス江戸川台研修所 1973　神戸文化ホール、鈴鹿市体育館 1974　日本住宅公団森之宮住宅、熱帯農業研究センター、大阪市立環境技術研究所 1975　日商岩井大阪本社ビル 1976　豊橋勤労福祉会館、岡山市立津山総合体育館 1977　辰馬考古資料館、徳島信用金庫福島支店、美津野養老工場管理センター 1978　芸西病院 1979　興亜火災海上保険（現日本興亜損害保険）本社ビル、ホリディ・イン南海大阪（現クロスホテル大阪） 1985　インテックス大阪 会場の中央に架けられた大屋根は、1983年我が国初の骨組み膜構造として建設大臣認定を得た、床面積3,000㎡、膜内容積60,000㎡に及ぶ大空間である  1988　愛媛県警察本部庁舎、東京モード学園、鈴鹿市文化会館、富山厚生年金休暇センター 1989　京都市国際交流センター、武蔵野市総合体育館、佐賀市総合文化会館 1989　国際花と緑の博覧会政府苑木構造の接合部にハイテンションボルトを使用したハイブリッド構造を採用。5つのテーマ館毎にシェル構造、立体トラス構造等異なった構造方式を採用	1990　三重県議会棟 1991　りそな銀行本店、大同生命・興亜火災ビル 1992　広島広域公園陸上競技場広島ビックアーチ、草津市庁舎、千里ライフサイエンスセンター 1993　大阪市立総合医療センター 1994　イオンタワー、神奈川県産業技術総合研究所 1995　警視庁渋谷警察署庁舎、象印マホービン本社別館、横浜市環境事業局鶴見工場 1995　大阪城「平成の大改修」 21世紀においても大阪のシンボルであり続けるよう、耐震性・耐久性の向上、内外装、バリアフリー対策等の「平成の大改修」を行う 1996　鳥羽シーサイドホテル 1997　横浜国際総合競技場日産スタジアム、甲南大学、宗像市総合保健福祉センターメイトム宗像 1998　ホテルブライトンシティ蓼科、関西ペイント東京工場技術棟 1999　富山県西部総合体育館、日本中央競馬会小倉競馬場、パナソニック人材開発センター研修所 	2000　さいたま新都心合同庁舎、京都府警察学校 2001　大阪府民共済本部ビル、北九州市消防局、帝塚山大学 2002　滋賀県立成人病センター 2003　神奈川県立保健福祉大学、独立行政法人労働者健康福祉機構 関西労災病院 2004　田原本青垣生涯学習センター、JA大阪センタービル、成田市保健福祉館、都市再生機構汐留H街区超高層住宅アクティタ留 2005　ライオンスタワー月島、ヨドバシ「AKIBA」ビル、トーハン桶川SCMセンター 2006　富士フィルム先進研究所 	2010　函館競馬場スタンド等整備工事、武田薬品工業研修所・宿泊棟 2011　みなとみらいグランドセントラルタワー、社会医療法人愛仁会 愛仁会リハビリテーション病院、イオンモール伊丹昆陽 2012　広島法務総合庁舎、富山県広域消防防災センター 2013　香川労災病院救急棟、税務大学校大阪研修所、横須賀地方合同庁舎、明石医療センター増改築	
	1952　富士フィルム大阪支店	1952　富士フィルム大阪支店	1952　富士フィルム大阪支店	1952　富士フィルム大阪支店	1952　富士フィルム大阪支店	1952　富士フィルム大阪支店	1952　富士フィルム大阪支店	1952　富士フィルム大阪支店	1952　富士フィルム大阪支店
歩み	1932　東畑謙三建築事務所開設 所員数5名 1937　設計監理のため中国に所員派遣 1939　大阪府豊中市に分室設置	1940　所員数　10名 1941　東畑謙三、京都大学講師 1948　東畑謙三、大阪大学講師	1950　所員数　20名 1951　東畑謙三、日本建築協会副会長　東畑建築事務所に改組　一級建築士事務所登録 1957　九州支社を開設、本社を大阪市東区伏見町に新築・移転 1958　東京支社を開設	1960　所員数　91名 名古屋支社を開設、清林社を設立 1961　東京支社を東京事務所に昇格移転　東畑謙三、藍綬褒章 1963　名古屋支社を名古屋事務所に昇格 1964　東畑謙三　日本建築家協会会長に就任 1966　東京事務所、永田町ビルに入居 1968　東畑謙三、日本建築家協会終身会員	1970　所員数173名 1971　東畑謙三、日本建築協会名誉会長 DEMOS導入 1972　東畑謙三、日本建築学会名誉会員、勲三等瑞宝章受章 1973　東畑謙三、沖縄国際海洋博覧会協会建設顧問 伏見町ビル竣工 1975　北九州支所移転（清和ビル）、技術開発室設置	1980　所員数　231名 北九州支所、北九州事務所に昇格 1982　東畑謙三、取締役会長 市川宏、取締役社長 1983　横浜支所開設 1986　市川宏、黄綬褒章 1987　福岡支所開設 1988　大阪事務所CAD導入 1989　九州事務所移転（福岡センタービル） 東畑謙三、紺綬褒章	1990　所員数　292名 情報システム室設置 1991　都市開発部、情報管理部設置 1994　名古屋事務所移転（三井生命名古屋伏見ビル） 市川宏、日本建築協会会長 1997　東北支所移転（仙台市青葉区） 東畑謙三、取締役名誉会長 市川宏、代表取締役会長 真塚達夫、代表取締役社長 1998　東畑謙三　没（享年97歳）	2000　所員数　316名 2004　谷淳之介、代表取締役社長 環境計画室、海外事業プロジェクト室設置 2007　創立75周年記念事業として「清林文庫」展を武庫川女子大学甲子園会館にて開催 2008　雑誌「近代建築」2008年1月号 特集：東畑建築事務所創立75周年「歴史と未来のコンテクスト」発行、九州事務所が移転（富士フィルム福岡ビル） 2009　香西喜八郎、代表取締役社長	2010　所員数　282名 広島支所を開設、名古屋事務所が移転（名古屋KSビル） 2011　市川宏　没（享年87歳） 2012　香西喜八郎、日本建築協会会長 本社・大阪事務所が移転（新高麗橋ビル）

光の建築家 陰の建築家

米井 寛

本稿は、東畑建築事務所の現大阪事務所長の米井寛氏により、1998年の東畑謙三氏の逝去直後に、執筆されたものである。東畑謙三氏の人格や建築に対する基本的なスタンスの理解に大きく役立つと考えここに再掲する。本稿の初出は、東畑建築事務所の社内誌である『GJ』Jui98 vol.12(1998年7月発行)』である。(建築人編集)

写真 1：ファルネーゼ宮 2：千里ライフサイエンスセンター 3：エイヘンハルト集合住宅（デ・クラーク） 4：デ・ダヘラート集合住宅（デ・クラーク） 5：ベッキオ宮 6：孤児養育院



私が初めて東畑さんにお目にかかることができたのは、一九八四年四月の入社式の日であった。当時はすでに会長職に退かれており、入社式の後の地下食堂での昼食会が初めての東畑さんとの面談であった。その日の献立は、（長年入社式の日はその決まっていたのだそうだが）鯛の尾頭付きにバナナが一本添えてあるというものだった。東畑会長にとってはバナナはいつまでたっても高級品なんだ、という話を後にどなたかから伺った。その年の技術職の新入社員は私ひとりだったこともあり、大学の先生のことや研究内容のことなどを集中的に質問されたことを覚えているが、とにかく緊張しっぱなしの昼食会であった。

その後は東畑事務所の社員としてご指導いただく立場となったわけであるが、当時東畑会長は、三階の設計部には週に一度か二週に一度、重そうな靴音をたてて上がってこられる程度であり、すでに具体的な設計指導はほとんどとどまっていなかった。むしろ私たち「若者」には、彼女はいるのか、結婚はまだか、といった冷やかし半分の楽しく親しみ深い言葉をかけて歩いて行かれるのが常であった。

したがって、東畑さんの建築観や歴史観、あるいはご趣味の話をじっくり伺うという機会はなく、直接会話らしきものを交わしていただいた時間は、総計でも一時間に満たないのではないかとさえ思われる。その中で、自分の関わっている仕事に対してコメントしていただいた唯一の経験は、「千里ライフサイエンスセンター」の設計をしているときであった。「千里ライフサイエンスセンター」は、「くもくも型」のスカイラインをもつ高層ビルであるが、そのエレベーター

の近代建築運動をいち早く日本に紹介し、かつ自らもアルバート・カーンら米国の建築家の合理主義思想に傾倒し近代建築運動の推進者のひとりになろうとしたかに見える東畑謙三の、中世建築、あえていえば「農民芸術的」ともいえる中世の尖塔へのシンパシー。近代建築の「構成」的手法を早くから理解し実践する一方で、深い陰影を刻んだこれら近代以前の建築造形への憧憬、いわば精神と肉体とが行き場を違い、焦点



を結ばないまま、両者は東畑の建築造形の中で断片的に交錯するような様相を見せる。そしてこの両義性は、東畑の処女作「東方文化学院京都研究所」や、その後の自ら筆をとったといわれるいくつかの博物館建築などの中に具体的に見え隠れするような気がするのである。

昨年秋、私はオランダ建築を訪ねる旅行を企画し参加する機会に恵まれた。それは、若き日の東畑謙三が日本に紹介した「オランダ

ションを製図版に張っているとところに東畑会長が現れ、しばらくじっと眺めた後、「君、これは農民芸術だ！」と鋭く言い放ったのである。「えっ、農民芸術」って何ですか？」というような質問が当時の私にできるはずもなく、ただただ聞き入るしかなかった。とはいえ、先輩諸氏のお話によくある通り、「農民芸術」とは何かという説明を詳しくしていただけのわけでもなかった。そしてその後、そのエレベーションの上にトレペを当てて、「君、ここはこうした方がいいんだ」と直筆のご指導となったのである。残念ながら東畑さんに描いてもらった最初で最後のスケッチはもう手元がないが、「くもくも」



の交点は、素っ気なく直交させるのではなく、スリットをとるような配慮が必要だという内容だったと記憶している。

それにしても、「農民芸術」とはいったい何だったのか。おそらく、そのエレベーションは、野暮ったくて洗練されておらず、近代主義にも反したものだということを批判的にコメントされたのであろうかと思われた。しかし浅学な私には、東畑会長の言葉の背景をそれ以上想像する手だてもなかった。

昨年（一九九七年）は事務所創設六五周年

ンダ建築の潮流」を実際に見る旅でもあった。北ヨーロッパのはるかな小国に思いを巡らせた東畑青年が、その後この国を訪ねたかどうかを私は知らないが、『建築学研究』に紹介された建築家の作品は、近代建築運動のメルクマールとして、今も私たちを迎えてくれる。

オランダは清貧を重んじるプロテスタントの国であり、国土の大半が干拓地という「海から土を、土から金を」産み出した



国であり、また、その優れた海運技術により一七世紀には世界に覇を唱える強国にもなった。この国の歴史に通底するのは、権威や伝統ではなくひたすら実利と自由を追求する合理主義の精神であった。こうした「名より実」をとる精神風土が、アウト、リートフェルトらのデ・スタイルから、現代のクールハースらに至るまでの、一見して軽くしなやかですがすがしいような建築表現を生み出していると思われる。ところが、

年の年にあたり、機会あって東畑さんの若い頃からの著述のいくつかを読むことができた。特に京大時代には、建築学会の『建築雑誌』に対抗する学術誌として『建築学研究』を発刊し精力的に執筆を行っており、東畑さんのいう「私がコルビュジエを最初に日本に紹介した」媒体がこの『建築学研究』であった。そしてその中の、一九二〇年代の「現代」オランダ建築を解説したJ・J・P・アウトの論文を紹介する記事に、「農民芸術」なるフレーズを見つけ、先に述べた「千里ライフサイエンスセンター」に対する東畑会長のコメントをはたと思い出した次第である。

その記事では、オランダ近代建築の父といわれるH・P・ペルラーへ以降のオランダ建築界の二大潮流を解説している。そのひとつはアムステルダムを本拠とする、デ・クラークらの「形体美」を追求する一派（アムステルダム派）、もうひとつはロッテルダムを本拠とする、J・J・P・アウト、リートフェルトらによる「合理主義」を追求する一派（デ・スタイル）であった。記事の最後を東畑さんは次のように結んでいる。

「海より低い泥の国、風車のゆるやかにまわる園、原色を用いて身仕舞をするオランダ乙女の国、北国の淡い光の照る国、わら屋根から煙の上がる国、農民芸術の国、これらのことをはるか想像するとデ・クラーク一派の建築の生じたこともうなづかれる。又、天産に恵まれぬ国、平等な国、田園都市的な国、強国に挟まれた弱国、大きな植民地を持つ生産国、これらのことをはるか想像するとJ・J・P・アウト一派の建築の生じたこともまたうなづかれる。両派はたがいに反省者となり、又好伴侶となって

これらの軽みを帯びた表現とは対極にあるのが、デ・クラークらアムステルダム派の深い陰翳の刻まれた建築であった。それは陰鬱な北の海か、深い針葉樹の森を背景に建つのがふさわしいような、まさに東畑さんのいう「北国の淡い光の照る国、わら屋根から煙の上がる国、農民芸術の国」の建築であった。それはまた、オランダの生んだ「農民芸術家」ともいえるゴッホの「馬鈴薯を食べる人びと」や、同じくオランダに生まれた偉大な画家レンブラントの光と陰の扱いを連想させるものでもあった。

「両派は互いに反省者となり、又好伴侶となってオランダ建築界は活躍することである」と東畑青年はいうが、私は同一の風土に生まれたあまりに異なる建築造形に驚きながら、もし東畑さんが同じようにここを訪れていたら、果たしてこの国の建築の何をいちばん評価して帰国しただろうかということを考えた。アウトやリートフェルトに出会えたことへの喜びはあるに違いない。しかし、「正直なところ、当時の新建築は写真のほうが良く」（私の建築印象）というところ、これらは一瞥しただけで立ち去ったかもしれない。むしろ「農民芸術の国」の建築の、陰翳のある造形や細部まで行き届いたディテールに感銘を受けたのかもしれない。そういえば、入社間もない頃大阪に来たゴッホ展に行くように強く勧められたことがあったと思ひ出しながら、あるいは、東畑さんの卒業設計の湖畔に建つ宿泊施設の親自然的ないしロマン主義的相貌をもつドローイングを改めて目にしながら、私は、「農民芸術」またはそこから連想される合理主義には反する建築造形への関心を深層に抱えているかのような東畑さんの建

築観を想像してみるのである。

そもそも近代建築運動は、「農民芸術」またはフォークロア（民芸）のような無名性、非論理性、恣意性を排除し、純粹で論理的な空間の構成原理をもって出発したと考えられる。おそらくそのことを理解した上で、合理主義的な建築プランや生産システムの提案を数々行い、自らを「構成技師」と呼びながら、表現よりもシステムを、個の表出よりも匿名性を常に優先しながら近代主義建築家として名を馳せた東畑謙三が、にもかかわらず、おそらく終生持ち続けたと想像される「農民芸術」またはフォークロアのなものへの関心に、建築家のアンビバレントな迷いを見る思いがするのである。人間的といえばまさにそうであり、また、人前に立つ東畑さんの表情に時折見いだされた含羞は、もしやこのアンビバレントな迷いの表れではなかったろうかとさえ想像されるのである。

「光の建築家」「陰の建築家」といういい方ができるかもしれない。先に見たアウトやリートフェルトは、近代建築を切り拓き今なお参照の対象にされる輝かしい実績においても、その明晰な造形言語においても光の建築家というべきであろうが、一方、アムステルダムので・クラークらは、決して世界を揺り動かすことにはなり得なかった建築史上の位置づけにおいて陰の建築家といふべきかもしれない。ミースを光の建築家と呼ぶなら、造形よりも構成システムをデザインし、またバウハウスを創設して建築教育に力を注いだグロピウスは陰の建築家といえるだろう。国内においては、コ

ルビュジェに師事し、帰国後は日本の建築デザインのある部分を牽引した坂倉準三や前川國男を光の建築家というなら、彼らと同世代の我が東畑謙三は陰の建築家といえるかもしれない。それは、「美術建築」ではなく「産業建築」という社会の下支えとなる領域を主に手がけたということからいえるし、また自らを「建築家」ではなく「建築技師」または「構成技師」と呼び、個人の表出を避けてクライアントのニーズに合理的に応える建築技術者としての姿勢を貫いたことからいえる。そしてまた、先に触れた作家としての明解な造形理論の表明を避けてきたとも思われるアンビバレントな姿勢や、あるいは、今も忘れることのできない含羞を帯びた利那の表情からも、自信に満ちた日頃の言説とは裏腹の内省的な陰翳を見る思いがするのである。

ルイス・カーンは、宇宙は光らない光 (light nonluminous) と光る光 (light luminous) によってできあがっていると説いた。光らない光は表現するために、光る光は作るために存在している。あるいは、光らない光は生命で、光る光は物質であるという。

巨匠たちの放つ眩いばかりの閃光に比べれば、鈍くか細くたどたどしい光であったかもしれない。しかし、含羞の建築家東畑謙三が、作家性を排し、あえて「構成技師」というもう一つの建築家の職能を見いだそうとした行き方は、歴史に刻まれるべきであろう。

光は陰の存在によって初めて光として認識される。光の建築家と陰の建築家、それらに対する真の評価は後世の歴史家にゆだねられることになろう。(一九九八年記)



東方文化学院京都研究所 撮影：田籠哲也

道端に雪が残る肌寒い今年二月、機会あって、谷口吉郎（一九〇四〜七九年）の代表作の一つ、秩父セメント第二工場（一九五六年、現・秩父太平洋セメント秩父工場）を初めて見学する機会があった。谷口にとって、藤村記念堂（一九四七年）に続き、二度目となる日本建築学会作品賞を受賞した自信作であり、近年では、一九九九年に、DOCOMOMO Japan によって、日本を代表する近代建築二〇選にも選ばれている。池袋から特急列車に乗って約一時間、西武秩父駅で下車し、タクシーで現地へと向かう。市街地を過ぎると、遠くに工場のシンボルである煙突が見えてくる。近づくうちにその巨大さに圧倒される。敷地面積二十八万㎡、竣工時の延床面積三万五千㎡という空前のスケールの一大建築群である。

このセメント工場は、戦後復興から高度経済成長へと向かう中で、模範となる最先端のセメント工場の実現を目指して、計画が進められた。そのため、建設にあたっては、谷口の陣頭指揮の下、建設委員会が組織され、導入される機械を担当するデンマークのスミス社をはじめ、秩父鉄道の輸送部門の専門家など、多くの技術者が結集された。また、建築についても、実施設計と工事監理を日建設計工務が担当する万全の体制が整えられた。掲げられた設計理念は、谷口の次の文章に良く表れている。

「留意した点は塵埃に対する考慮である。いままでの古いセメント工場では塵埃がひどく、工場の付近一帯は全く「灰の色」であった。そのために社会問題まで起る場合が多かったので、この新工場においては全工場に密封式が採用された。したがって全長二四〇mの原料置場にも屋根が設けら

記憶の建築 松隈 洋

秩父セメント第2工場 1956年
清潔で美しい工場をめざして



中央通路から見る仕上粉末室棟



工作工場の内部

れ、そのほか塵埃を飛散する場所には防塵装置を完備して、塵埃処理には万全を期したのである。同時に騒音や、そのほか工場内の乱雑な非衛生など一切のごみごみしたものを払いのけ、さらに工場内の空地には緑の芝生や色彩の美しい花壇までつくり、これがセメント工場かと怪しまれるほどの、気持ちのいい生産環境を実現したいと、建設委員会は意気こんだのであった。したがって私たちは機械時代に生きる技術者として、工場は生産能率の場であると同時に、

り方を一変させるべく、高窓に清掃用の歩み板を設けたり、外壁を構成する鉄製サッシュ面を柱から突出させることで窓枠や外壁パネルの割付を自由にしたり、屋根に長尺のトタン板を用いることで塗装を省くなど、材料と構法に配慮する工夫も施した。こうして、原料置場、粉末室、スラリータンク、キルン（回転窯）、仕上粉末室などからなる一連の建築が、明晰な集合体となって広大な敷地に伸びやかに配置された。そして、何よりも谷口が重視したのは、

長く追い求めてきた機械時代に相応しい近代建築の姿を自らの手で実現させたいという願いが込められていたのだと思う。竣工後、谷口は、次のような文章を記している。

「昔の人々は力を合せて美しい寺院を築いた。それには当時の技術が結集している。同時に、その建築には当時の建設的な良心がこもっている。そのために美しい感銘を後世の人に与えるのであろう。しかし、現代はすでに宗教の時代でなく、機械の時代である。したがってその機械の建築、すなわち工場のために現代人は、現代の技術をそれに結集すると同時に、建設的良心をもそれに打込む必要がある。そんな意気込みでこの工場の建設には、生産・機械・建設・施工の人々が力を合せ得たことは、この上ない嬉しいことであった。だから、このセメント工場の建築はこれらの人々が奏するセメント・シンフォニーだと言い得るかもしれない。」（谷口吉郎「セメント・シンフォニー」『新建築』一九五六年十月号）

谷口は、中世の職人たちが力を合せて築いた寺院にも匹敵する現代建築の象徴としての工場を目指したのである。そこには、戦前に視察に訪れて感銘を受けたというペーター・ペーレンスのAEGタービン工場（一九〇九年）や、さらにその先にあるシンケルの古典主義へと通ずる谷口建築の原点を読み取ることも可能だと思う。第一期竣工から半世紀以上の月日が流れ、工場を取り巻く環境も激変した。しかし、この工場は、今も清新な建築精神を伝えている。

松隈 洋

京都工芸繊維大学教授、博士（工芸）。一九五七年兵庫県生まれ。一九八〇年京都大学卒業後、前川國男建築設計事務所に入所。二〇〇八年十月より現職。



いたみ犬猫病院はご夫婦とも獣医師をされていて、親切で腕のいいことで評判の病院です。この度、手狭になったため、すぐ近くに新築移転されることになりました。設計するにあたり、来客者に「おもてなし」の心で接したいと考えました。正面列柱のポーチは建物に奥行きや陰影を出すためですが、来る人をお迎えする空間であります。また待合ホールは天井が高く、大きなガラス面（東向きのため木製の横ルーバーもある）からの光に満たされた安らげる空間となっています。ホール壁面にはシンボルカラーの青緑を一面にペイントし、ガラス越しに道路から望めるようにしました。おかげさまで、目下先客万来で嬉しい悲鳴だそうです。

所在地：伊丹市千僧大
用途：動物病院
竣工：2013.11
構造規模：鉄骨造2階建
敷地面積：602.93㎡
建築面積：266.60㎡
延床面積：423.66㎡
写真：母倉知樹



大阪市都心部、都島に建つ研究所の増築である。住宅地に建つ特性上、「外に閉じ内に開く」構成とし、周辺環境や既存研究所と調和しながらも存在感のある建築を目指した。コの字のRC耐震壁から鉄骨造のボリュームが跳ねだす明快な骨格をベースとし、機能分解されたそれぞれのハコが積み重なることによって、ヴォイドとしての中庭ではなく、外部空間を立体的に内包したような建築となっている。研究諸室からの風景の主役として中庭や屋上庭園を計画しているが、内向的なベクトルの中にも小さな隙間や開口部を設けることで、都市との連続性が感じられる豊かな研究環境を形成している。

建築主：株式会社ミルボン
所在地：大阪市都島区
用途：研究所
竣工：2013.12
構造規模：SRC造（一部S造）
地上3階（増築部）
敷地面積：4,111㎡
建築面積：1,178㎡（増築部）
延床面積：2,488㎡（増築部）
写真：古川泰造

第7回 建築人賞

主催：公益社団法人 大阪府建築士会

公益社団法人大阪府建築士会では
本誌「建築人」の Gallery に掲載された建築作品を対象に
社会性、芸術性、時代性を考慮して、顕彰、公表することにより
建築技術の進展、建築文化の向上に資することを目的として
建築人賞を実施しています。

■ 審査委員長 古谷 誠章（早稲田大学教授）



1955年 東京都生まれ
1978年 早稲田大学理工学部建築学科卒
1980年 早稲田大学大学院修了
1986～1987年 文化庁芸術家在外研修員として
マリオ・ボッタ事務所在籍
1994年～ 八木佐千子とスタジオナスカ（現NASCA）
共同設立
1994年～ 早稲田大学理工学部助教授
1997年～ 早稲田大学教授
本年度より建築人審査委員長

■ 表彰（設計者に対して）

建築人賞 （賞状と記念盾）

建築人奨励賞（賞状）

※建築主・施工者には感謝状授与

■ 第7回 対象作品

「建築人」2014年1月号から2014年12月号まで
Gallery に掲載された建築作品

※建築種別、建築地を問わない。但し、竣工検査済証を受けたもの

■ 審査方法（2段階審査）

一次審査 建築人誌面より選定

二次審査 二次審査資料により選定（現地視察含む）

■ 受賞発表

建築人2015年7月号誌面（予定）

■ 問い合わせ

公益社団法人大阪府建築士会「建築人賞」係
TEL 06-6947-1961 FAX 06-6943-7103



建築人賞 記念盾 「未来へ！」
ガラスアーティスト 三浦啓子作

『建築人』 Gallery 掲載作品 募集中 2014

会報誌『建築人』では、Gallery に掲載する作品を
募集しています。

【掲載料】

カラー 2ページ 20万円

カラー 1ページ 10万円

モノクロ 2ページ 10万円

モノクロ 1ページ 5万円

※モノクロページは住宅に限ります。

詳しくは、公益社団法人大阪府建築士会『建築人』
Gallery 建築作品掲載係まで。



兵庫県篠山三和線と宮田川に挟まれた敷地に、アイボリー色の工場棟
がいくつか建ち並んでいる。業界トップクラスの金属精密研磨技術を保
有している藤枝研磨工業所の篠山工場である。この篠山工場に、旗艦工
場となる黒灰色を基調とした外観の新工場を建設した。新工場には篠山
工場全体の中核となる事務所ゾーンと1200㎡の工場ゾーンを、2層吹き
抜けの階段室を挟む単純な矩形で構成した。藤枝研磨工業が創業以来お
こなってきた「和」の理念による経営を受け、奇をてらわずシンプルで
質の高い建築設計をおこなった。エントランス底下の弁柄色の実直で無
機質な工場に彩りを与えている。
(筑波幸一郎)

所在地：兵庫県篠山市
用途：研磨工場
竣工：2013.12
構造規模：鉄骨造2階建
敷地面積：8322.07㎡
建築面積：1622.25㎡
延床面積：1848.88㎡
写真：田籠哲也

大阪の冬の風物詩となった「OSAKA 光のルネサンス」「御堂筋イルミネーション」が、昨年から「大阪・光の饗宴」とネーミングを変え、さらにバージョンアップしました。「光のまちづくり推進委員会」事務局長の関西電力・石田文章さんに、その活動の趣旨から今後の展開などについてご紹介いただきます。

「光のまちづくり」による大阪の都市魅力向上

石田 文章

関西電力株式会社総合企画本部地域エネルギー開発グループ担当部長および光のまちづくり推進委員会事務局長。1986年3月東京大学工学部電気工学科卒業、同年4月関西電力に入社。主に、送変電設備の計画、解析業務に従事。以降、2003年6月研究開発室研究企画グループマネジャー、2007年6月秘書室マネジャー、2009年6月NEDO（新エネルギー・産業技術総合開発機構）新エネルギー部統括研究員出向を経て、2012年6月より現職。現在は、スマートグリッド、スマートコミュニティ、再生可能エネルギーの戦略策定分野に携わる。専門分野は、電力システム解析、再生可能エネルギー技術、スマートグリッド技術。

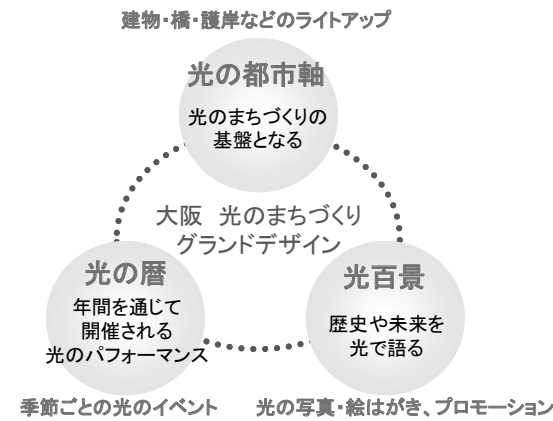


図1 大阪 光のランドデザイン

大阪では、二〇〇二年に「花と緑・光と水懇話会」が発足し、都市再生への官民あがての取り組みが始まり、その後二〇〇四年に「光のまちづくり企画推進委員会」が結成され、大阪の光のまちづくりに関する本格的な活動がスタートした。二〇一三年七月からメンバーも見直し、「光のまちづくり推進委員会」として再スタートしている。メンバーとしては、大阪府、大阪市、民間、有識者などで構成されている。

二〇〇四年からの大阪の光のまちづくりの活動から一〇年が経過したが、官民が協力した活動が徐々に実を結び、行政による橋梁、護岸のライトアップ整備、民間による高速道路橋脚ライトアップ、近代建築のライトアップ、ビルのライトアップなどが実現していった。

大阪・光のまちづくり二〇二〇構想二〇〇四年に策定された「大阪 光のランドデザイン」（図1）では、「光の都市軸」「光の暦」「光百景」を基本方針

としており、二〇一〇年に策定された大阪・光のまちづくり二〇二〇構想でもそれを継承している。大阪・光のまちづくり二〇二〇構想は二〇二〇年を目途に大阪ならではの一体感ある光のまちづくりを推進し、「水の都・大阪」＋「光の都・大阪」を国内外に発信することを目指す。行政・民間が一体となって取り組むための指針となっている。この構想に基づいて各エリアの光の整備やイベント、プロモーション活動がなされてきたのである。

「光の都市軸」

大阪・光のまちづくり二〇二〇構想では、光のまちづくりの基盤となる都市軸を「光の都市軸」と名づけ、「光の東西軸」「光の南北軸」「光の回廊」「光の庭」の四つの基軸で構成している（図2）。「光の東西軸」とは、東は大阪城公園・OAP・OBPから中之島を経て西はUSJ・天保山へ続く、大川・堂島川・土佐堀川に沿った軸を指す。「光の南北軸」とは大阪駅北地区を北端とし、難波・湊町を南端とした御堂筋を中心とした軸線を指す。「光の回廊」とは八百八橋と呼ばれる大阪の多数の橋が架かる水上の回遊動線を指す。「光の庭」とは光の回廊の中に位置する大阪市中部の近代建築を中心とした面的な広がりを目指す。光のまちづくり推進委員会では各都市軸のコンセプトや今後の展開の方向性を定めている。

特に中之島エリアは水都大阪を代表するエリアである。四季折々の自然と恵まれた水運などにより、近世から今日に至るまで大阪の発展を支え、水都のイメージを作ってきたエリアといえる。豊かな水と緑、多くの近代建築、川に架けられた数々の橋梁など、多くの景観上の資産

がある。このエリアを中心にして、光のまちづくり、ライトアップ整備は進められてきた。

中之島西部エリアは、現代大阪を代表する文化・交流・住居空間である。国際会議場、放送局、サテライト大学院、美術館、ホテルなどが立ち並び、超高層のマンション開発が新たな都市住居エリアを形成している。堂島大橋（写真1）、玉江橋のライトアップや大阪国際会議場前護岸、ほたるまち護岸のライトアップ、大阪国際会議場前港、福島港（ほたるまち港）といった船着場のライトアップなどが整備されている。

中之島中央エリアは、中央公会堂、府立図書館、日銀大阪支店などの近代建築が集積し、近代大阪の風格が残る空間である。中之島ガーデンブリッジ、堂島川の阪神高速橋脚、日本銀行北側護岸のライトアップは、水都大阪を象徴するイメージカラーのブルーで統一された演出が始まっている。

中之島公園エリアは、自然にふれる都心の憩いの空間である。中之島公園の整備も行われ、土佐堀川南側には北浜テラスが展開されている。天満橋・天神橋・難波橋の三橋は「浪速（なにわ）」の三大橋と呼ばれているが、二〇〇九年八月に天神橋と難波橋、二〇一一年七月に天満橋でライトアップが開始された。

「光の暦」

いつ訪れても楽しい街となるよう、「光の都市軸」に光のイベントや光のパフォーマンスによる季節感を与えることで、光のまち大阪を活性化する取り組みが「光の暦」である。

特に冬の光のイベントにおいては、「O

に誘致しようと考えている。

二〇二〇年に向けて

光のまちづくり推進委員会では、大阪の光のまちづくりを進めていくことで、大阪の都市魅力やブランド力を向上し、国内外からの滞在型観光客の増加や大阪の経済力の発展を目指している。そして二〇二〇年には、大阪らしい光であふれ、多くの観光客が訪れる「光の都・大阪」となるよう、引き続き今後も官民一体となって光のまちづくりを推進していきたい。



写真2 大阪・光の饗宴（大阪市中央公会堂 3D マッピング）



写真1 堂島大橋ライトアップ

「光百景」

個性的で、市民が誇れる大阪の光や大阪の夜間景観を集約し、国内外へ情報発信するなど、大阪・光のまちづくりの取り組みを促進するためのプロモーション活動が「光百景」である。

光のまちづくり推進委員会では、webやマップによる情報発信、LUCI（Lighting Urban Community International）を通じた海外への情報発信などに積極的

に取り組んでいる。LUCIとはフランスのリヨン市を中心とする光景観創造国際ネットワークである。ライティングを戦略的かつ魅力的

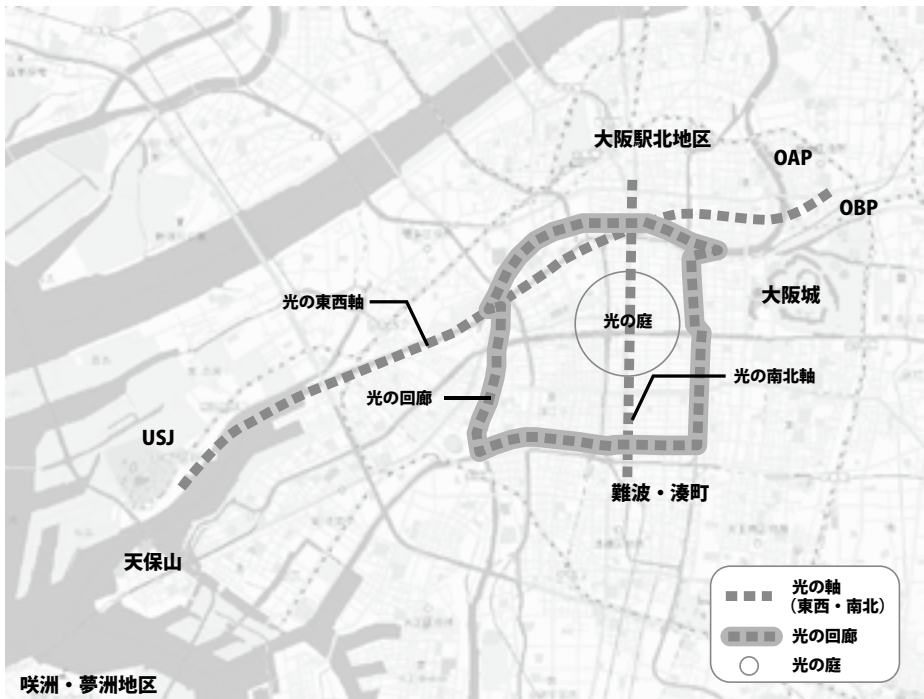


図2 光の都市軸



「子羊の群れキリスト教会 風の教会」 設計：日本設計 関西支社 写真：稲住泰広

光の無い真つ暗な空間をイメージする。そこに一つずつあかりを灯してゆく。あかりの中に空間が立ち現れてくる。無駄の無い最も少ないあかりの構成で空間を成り立たせたい。それこそが、空間の本質を捉え、より良く見せることに繋がる。そう語るのは、今回、取材に訪れたアカリ・アンド・デザインを主宰されている照明デザイナーの吉野弘恵さんである。吉野さんの言葉を引用すると建築照明とはアーキテクチャルライティングの事である。それは如何に空間を照明によって引き立たせることができるかであり、そうでありながら如何に照明自身を消す（目立たなくする）ことができるかである。空間を引き立たせる為には、照明は主張してはいけなく考える。吉野さんが手掛ける建築照明は、空間全体が一つの照明そのものになり、言葉にできない心地よさを創り出している。

取材当日、吉野さん事務所を訪れた私は、様々な国際的評価を受けられている照明デザイナーという肩書きから、どこか独善的で少々気難しい人柄を勝手に想像していた。しかし、出迎えてくれたのは、私の想像とは逆の、親しみと安心感を覚える温厚で人当たりの良い方であった。

デザインと言うと、綺麗で見栄えのよいものを想像される方が多いのではないだろうか。しかし、それはデザインのほんの白い光は、日中の太陽光と同じで、その光の下では人は活動状態になり、緊張した状態が続き、心が休まることがないという。家族みんなが心安らかに団欒する場所に「はたらけビームは必要ない」と吉野さんは言う。

光の位置を表す「高度」、光の強さを表す「照度」、そして炎が温度によって発する色の変化を表す「色温度」。これらが「三高」の状態である時は日中の太陽光と同じであり、逆に全てが低い「三低」の状態は囲炉裏や焚火の炎がつくるあかりと同じである。心休める空間に相応しいあかりはどちらか説明の必要も無いであろう。

「家族が集う食事の場所や心安らかに過ごしたい夜は、蛍光灯の白い光を消して、白熱灯の温かなあかりに変えてみて欲しい。きっと豊かな「真のあかり」による生活が得られる」と吉野さんは言う。

私たちは明るさばかりを追いかけて、憩いの場にならぬ白い光を持ち込み、それが豊かさだと誤解し、未だに効率ばかりを追いかけている。所有することが豊かさで、明るいことが良しとされる誤った認識を改め、真の豊かさとは何かをもう一度問い直す必要がある。吉野さんとの会話の中にその答えがあると感じた。

人は、その昔、光を通して神を見た。光の記憶を呼び覚ますことで真に豊かなものへと向かうことが出来る。それは意外と身近な所にあるのかもしれない。吉野さんの豊かなあかり環境への取り組みを力強く感じた今回の取材であった。

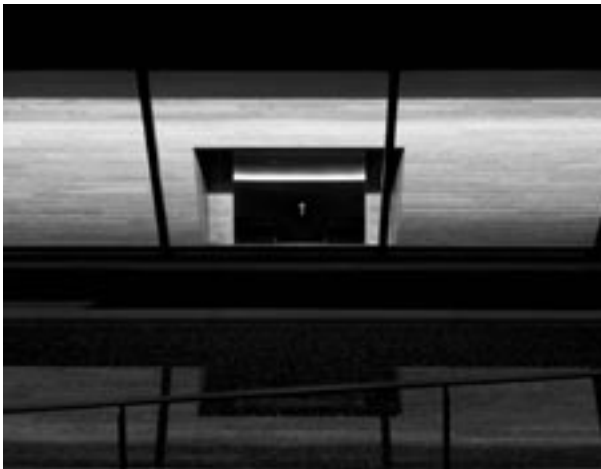
白いよ」と誘われ、面白いならいいだろうと入社する。配属先は、意匠を扱うLDやマギワ研究所ではなく、照明計画などを行うTLやマギワ研究所であった。照明器具などを華やかにデザインするLDとは対照的に、TLでは黙々とテンプレートを使って図面上にダウンライトを落とし込む地味な作業ばかりの日々が続いた。最初の数年間は辞めることばかりを考えていたそうである。

吉野さんの転機はバブルがはじけると時を同じくして、空間を扱うダウンライトの研究開発に携わったことだった。光の本質を知り、華やかな外見の意匠に向いていた目が、空間そのものへと向かい、照明に対する考え方が大きく変わったのだ。

照明の善し悪しの判断基準を聞くと「グレアのあるなしが、照明環境の善し悪しを別ける。けれどグレアまで気にかけてしっかりと整えられた照明環境は少ない」と吉野さんは言う。

グレアとは不快な輝度のこと、光源が直接目に入ることや、映りこみなどによって引き起こされる。設計における対策としては遮光角三〇度以上の器具を用いるなどいくつかのポイントがある。しかしそれ以前に直接光源が目に入らないように、映り込まないようにと、丁寧に気を配るだけで随分と美しい光環境を得ることが出来る。

そこには奇をてらう事なく、当り前の事を当り前に積み重ねることにより美しい照明空間を創ろうとする吉野さんの設計思想が根本にある。先の「建築空間のいいところ探し」の言葉の中にエゴは全



吉野さんは一般家庭でもよく目にする蛍光灯の白い光を指して「あれは、働けビームです」と表現されていた。蛍光灯

何かの代替ではなく LED だからこそ生みだせる
新しい価値を追求しています

ModuleX
www.Modulex.jp

GRID Fine liner
わずか 47.5mm の開口幅で
光質のパリエーションが選べます

株式会社モデュレックス
旧社名(株)ウシオスペースス

yamagiwa

株式会社 YAMAGIWA
〒541-0053 大阪市中央区本町4丁目1番7号 第二有楽ビル9階 TEL:06-7638-0080

んの一要素ではない。デザインとは本来、与えられた条件の中で、そこに在りながら、見えていないものや、それらを使う人々の無意識の欲求までも拾い出し、すくい上げ、整理し、並べ替え、新しい価値を生んでゆく営みではないだろうか。

そのことを吉野さんは「建築空間のいいところ探し」という言葉で表す。「照明が目立ってはいけなく」、「出来るだけ少ない要素で空間を成立させたい」と吉野さんは言う。それこそが「建築空間のいいところ探し」であり、空間が持つ良さを見つけ、最大限に活かすことを意味している。その結果、設計者から「よく解かったね、そこは僕が空間的に気に入っているところ」との言葉をかけられることもしばしばで、その言葉を聞くのが嬉しいと話される。

しかし、吉野さんは、初めから照明デザインの道を志していたわけではない。大学で環境計画を学んだ吉野さんは、プロダクトデザイナーを目指して、コンピュータの周辺機器メーカーとして有名なエレコム(株)に就職した。そこでの仕事にやりがいを感じながらも、もっとデザインだけを純粹に追い求めたいとの思いから、転職を決意した。

転職先は照明のヤマギワであった。面接の際、プロダクトデザインを希望した吉野さんだが「照明デザインはもっと面

第33回大阪都市景観建築賞(愛称 大阪まちなみ賞)入賞作品

◆表彰目的 周辺環境の向上に資し、かつ、景観上優れた建物や建物を中心とするまちなみを表彰することにより、個性と風格のある都市景観の形成に寄与するとともに、都市景観に対する意識の高揚を図ることを目的とする。

◆対象 大阪府域内の建物（平成20年10月1日から平成24年7月31日までに完成したもの）及び建物を中心としたまちなみ（平成24年7月31日までに完成したもの）で、一般の方々から推薦を受けたもの。

◆審査委員 ※50音順 審査委員長*

指田孝太郎(建築) (公社)大阪府建築士会相談役	佐藤 泰博(報道) 産経新聞大阪本社編集局社会部部长	下村 泰彦(造園) 大阪府立大学大学院生命環境科学研究所教授
塚口 明洋(建築) (公社)日本建築家協会近畿支部幹事・大阪地域部会長	中嶋 節子(建築) 京都大学大学院人間・環境学研究所准教授	夏原 見子(デザイン) 美術造形デザイナー
久 隆浩*(都市計画) 近畿大学総合社会学部環境系専攻教授	藤本 英子(芸術) 京都市立芸術大学美術学部デザイン科教授	

大阪府知事賞 関西外国語大学中宮キャンパス インターナショナル・コミュニケーション・センター



建築位置：枚方市上野 3-600-4 設計者：(株)日建設計
完成年月：2012年7月 施工者：(株)竹中工務店
主用途：学校 撮影者：古田雅文
建築主：学校法人 関西外国語大学
〈講評〉
大学の地域貢献が求められるなか、接道部分の校舎を活かして地域住民の利用の用に供するだけでなく、地域景観を形づくっている好作品である。道路側にはレストランやカフェテラスを配し、またワークショップなどができる教室をガラス張りにすることで賑わいを演出している。さらに道路と外部空間でつながった中庭側は、各階を微妙にずらすことで生まれる立体感が表情豊かなファサードを形づくっており、植栽もしっかりと取られている。（審査委員長 久 隆浩）

審査員特別賞 茶屋町ガーデンビル



〈講評〉
都心の繁華街に立地する本施設は、セラミックブロックで作られた「連ね格子」がスクリーン状の境界線を形成し、高密度な商業地域における賑わいのある界限景観を呈している。また、建て詰まった地域での狭幅員道路に面している状況にあって、各階テラスでの屋上緑化に加え、前面のセットバック部分に植栽されたヤマザクラが道行く人にとってスクリーンから垣間見え、緑の少ない本地域において季節感と潤いのある景観を提供している。（審査委員 下村泰彦）

大阪市長賞 アステラス製薬 加島事業場 厚生棟



建築位置：
大阪市淀川区加島 2-1-6
完成年月：2012年1月
主用途：
研究所・厚生施設
建築主：
アステラス製薬(株)
設計者：
清水建設(株)
(株)フィールドフォー・デザインオフィス
施工者：清水建設(株)
撮影者：
(有)フジタ写真工房
〈講評〉
製薬会社の医薬品研究施設という性格上、敷地境界でセキュリティを確保するために閉じられた表情となりがちであるが、前面道路側の既存樹木を全て残して緑の前庭を設け、大きなガラスカーテンウォールが印象的なファサードとして、街に対して開かれた表情をつくっている。敷地内の既存施設から利用しやすいよう配慮した通り抜けの通路、各所に設けられた屋上庭園やコミュニケーションスペースなど、研究者間の「知の交流」を促す、気持ちの良い、爽やかな厚生施設である。（審査委員 指田孝太郎）

緑化賞 堺市立健康福祉プラザ



建築位置：堺市堺区旭ヶ丘中町 4-3-1 設計者：梓・高橋設計共同体
完成年月：2012年2月 施工者：銭高・東レ・大井建設
主用途：児童福祉施設等 工事企業体
建築主：堺市 撮影者：数内正直

〈講評〉
北に仁徳陵、南に履中陵を望み、大仙公園と隣接した緑あふれる立地を生かし、壁面緑化や屋上緑化を積極的に取り入れて周辺環境との調和を図っているほか、再生材や自然素材を使用するなど環境保全にも配慮している。スポーツセンター機能を含む都市型の障害者福祉センターで、障害者と市民の交流の場となる拠点として、明るく生き生きとした空間を作り出している。（審査委員 佐藤泰博）

主催 大阪府・大阪市・(公社)大阪府建築士会・(一社)大阪府建築士事務所協会・(公社)日本建築家協会近畿支部・(一社)日本建築協会

◆審査総評

本年の審査対象63件（建物59件、まちなみ4件）から、例年通り審査資料にもとづいた1次審査で11件を選出し、現地審査による2次審査を行った。受賞作品は、教育施設、研究施設、商業施設、公共施設、医療施設、住宅、劇場、オフィスビル、体育施設と例年にも増してバラエティゆたかなものとなっている。
大阪府知事賞を受賞した関西外国語大学中宮キャンパスインターナショナル・コミュニケーション・センターは、大学施設の地域開放を前提としたデザインとなっており、道路に面した部屋をガラス張りにすることで室内のアクティビティが道路に賑わいを醸しだす演出がなされている。大阪市長賞を受賞したアステラス製薬加島事業場厚生棟は、企業マークの曲線で壁面をデザインすることで柔らかな印象を与えている。審査員特別賞は、一昨年はまちなみ賞、過去には大阪府建築士会長賞と呼ばれていたもので、卓越した建築デザインがまちなみを形成している作品に与えられるものであるが、今年度の受賞作品である茶屋町ガーデンビルは、手のひらサイズのセラミックブロックを連ねたスクリーンで建物を覆い、特徴あるファサードをつくっている。また、緑化賞を受賞した堺市立健康福祉プラザは、隣接する大仙公園や仁徳天皇陵の緑を意識し、壁面緑化を施している作品である。竣工後1年半ほどのため緑が十分に育っているとはいいがたいが今後の生長に期待しての受賞であった。
さらに奨励賞を受賞した5作品もそれぞれに特徴ある作品となっている。老木レディスクリニック2は、コンクリート打ち放しのシャープなデザインが印象的である。紀州街道の家は、歴史的まちなみに調和させるべく新たな和風のデザインを施している。オリックス劇場は長年大阪の人々に親しまれてきた大阪厚生年金会館のリニューアル物件である。大正製薬関西支店は、地区計画による5mの壁面後退部分の緑化を施し、中庭には地下1階から伸びる竹林をつくっている。J-GREEN堺はサッカーのトレーニングセンターであり、殺伐としがちな埋立地に緑豊かな景観を生み出している。

奨励賞 老木レディスクリニック2



〈講評〉
本施設は、法面上に立地するため周辺道路からは視認しにくく、起伏のある郊外丘陵地の景観を損なうことなく建設されている。さらに、敷地周辺におけるシマトネリコ等の高木植栽や屋上緑化が周辺環境に馴染んでいる。（審査員 下村泰彦）

奨励賞 オリックス劇場



〈講評〉
思い出の風景が残る
旧厚生年金会館大ホールが、そのイメージシンボルである備前焼の陶板タイルとともに蘇った。劇場前の公園と一体となって、大阪の都市施設として、西区の思い出の風景を継承している。今後の魅力ある運営を期待する。（審査委員 塚口明洋）

奨励賞 J-GREEN 堺(堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンター)



〈講評〉
用途転換で臨海地域のメリットを活かし、一般に開かれた世界水準の施設が出来た事を歓迎したい。手入れされた天然芝は平面の緑化だが魅力的な空間を提供し、構造物は強く主張する事なく未来の夢を育む子供たちが主役となれる場を提供している。（審査委員 藤本英子）

奨励賞 紀州街道の家

建築位置：和泉市あゆみ野 1-4-1
完成年月：2012年3月
主用途：医療施設
建築主：医療法人
老木レディスクリニック
設計者：安藤忠雄建築研究所
施工者：(株)竹中工務店

奨励賞 紀州街道の家



〈講評〉
岸和田駅以南の道筋はかなりまちなみ整備がされているが以北はこのままでは街並が壊れそうだ。下町気質の真ん中のこの下野町はまだ旧い大正や昭和初期の時代を経た美が残存しているがその内生活に適さなくなると、とんでもない建物に変貌しかねない。これは2軒を一つにし2世代3世代共に暮らし生活出来る平成の町屋の創出だ。いずれ年月の美を備える迄家族は家も町も大切に護り育て街も街道も続いて欲しいと願う。日本中の旧街道沿いの町家での暮らしを愛する人達と地域の共通の問題だと痛感する。（審査委員 夏原見子）

奨励賞 大正製薬関西支店



〈講評〉
中国自動車道と新御堂筋の交差点に面する立地にあって、外観を覆う水平ルーバーが機械やスピードを連想させる。一方、人々が行き交う足元には、在来種による緑化が施される。自動車道路からのダイナミックな景観と、歩道からのヒューマンな景観、ふたつの眺めの実現を試みた建築である。（審査員 中嶋節子）



審査風景

広がってゆく、スマートハウス。 そこに、大阪ガスの「ダブル発電」。

家庭用燃料電池「エネファーム」と太陽光発電を組み合わせた「ダブル発電」。

昼も夜も雨の日も、24時間、365日発電でき、自宅で使う電気の

約80%*をまかなえる「ダブル発電」が、

家を、暮らしを、どんどんスマートにしてゆきます。



ガスで実現するスマートハウス が、スマート!

※大阪ガス調べ

Design Your Energy 夢ある明日を

大阪ガス

お問い合わせ先：大阪ガス株式会社 リビング事業部 大阪リビング営業部 都市開発チーム 〒550-0023 大阪市西区千代崎3丁目南2-37

TEL：06-6586-3241 FAX：06-6586-3259 ホームページ：http://www.osakagas.co.jp

理事会報告

文責 本会事務局

日時 三月十九日(水)十六時～十七時三十分
場所 KKRホテル大阪
出席 理事三九名、監事二名、顧問他二名

(1) 会計報告の承認について

二月末日の当期経常増減額は、収益一三二、〇〇八、〇六六円、費用一二二、四九四、四六〇円、増減九、五一三、六〇六円を報告して承認された。

(2) 平成二十五年決算見込みについて
現時点での決算見込みは収支差引約二三六万円の黒字予測となることを報告した。

(3) 平成二十六年事業計画について
基本目標を掲げて、公益目的事業一・二・三、収益事業、その他事業の五部門に区分した事業項目と目的を明記したものを平成二十六年事業計画として承認した。

(4) 平成二十六年予算について
正会員数の減少傾向、事業系の参加者減等を考察のうえ、平成二十六年予算は、収入及び支出を一五〇、四二九、〇〇〇円、差引額を〇と計上して承認した。

(5) 平成二十六年機構・会務分掌(案)
新年度の機構にインスペクション、ヘリテージの部門を社会貢献委員会内に増設することを承認した。また、新任理事候補者及び留任理事・監事候補者を対象に会務分掌案を提示して理事会承認し、各候補者を定時総会に諮り理事・監事を選任することを確認した。

(6) 事務局職員の人事評価規程について
職員のモチベーション・スキルアップを目的とすることを説明し承認された。

(7) 近畿会長会議より本会会長を連合会副会長に推すことが承認された。

建築相談

建築士の見たトラブル事例(二十)

「一式」から見えるもの

編・構成 橋本頼幸

今月は、相談委員の守屋二之様に話題提供をしていただきました。

△相談事例1V「一式工事はどこまで!?

建物の外観に目立つ傷みが多くなり、屋根瓦のしっくいやり替え、破風板の板金を工務店に依頼した。工務店からは「屋根工事」で見積を受け取り、先日完成、引き渡しを受けた。しかし、施工範囲が思っていたところと違い、施工されていない箇所もあった。再施工を求めたものの、施工するには足場が必要となり追加費用がかかると言われた。

屋根工事「一式」というのは「全部やりますよ」ということではないのか?

△相談事例2V「見積もり比較の末」:

屋根葺き替え工事、雨樋の交換工事、外壁塗装の工事の見積もりを3社に依頼した。A社、B社の見積もりには詳細に項目が書かれ、似たような金額が提示された。C社には細かな記載は無くそれぞれの工事が一式として書かれている。金額は僅差でC社が少し高いのだが、以前の台風被害の修理を、少額だったにもかかわらず親切に対応して貰ったC社にお願いしようと思っている。

C社の工事「一式」には、他社の項目にある内容を全て含んでいると考え契約しても良いか?

「一式」が示すもの

守屋さんは、この「一式」表記で、リフォーム業者の体質や性格を読み取ることができるとお伝えしたそうです。守屋さんはこう続けます。

詳細な見積もりを作る事が不得手、そこは人情でカバー、依頼以上の工事行う業者も存在しますが、後々トラブルになる事も多いものです。詳

細な見積もりからは、事前にリフォームの内容をわかりやすく伝えようとしているか、工事後にトラブルにならないように説明を書面に残そうとしているか、といった配慮、業者の姿勢を読み取ることができます。

発注者と施工者の認識の違い

曖昧な表現では、頼む方と頼まれる方で認識が異なるのは当たり前のことかもしれません。

最終的に判断するのは、相談者自身ですが、「一式」という表現では、発注者が思っている範囲と、施工者が思っている工事範囲に違いがあると思うとおいた方がよいでしょう。

これは、発注者と設計者の関係も同じことが言えるのかもしれません。

「こんなはずじゃなかった」とならないために

守屋さんは、相談者に以下のようにアドバイスをしたそうです。

細かい明細を「よくわからないから」と敬遠せず、「こんなはずじゃなかった」と後で後悔する事を無くすためにも、わからない事は何でも施工者に質問しましょう。「いったい、何をいくらで頼んだのかを明確にすることによって、工事内容を変更したい場合なども、金額の増減もはっきりと判断することが出来ますので、くれぐれも「一式」には注意しましょう。

さて、(公社)大阪府建築士会では、従来週三回だった建築相談室を、本年四月より週五回(平日の月・金)午後二時から四時まで行うことになりました。電話や面談で一般の方を始め設計事務所や施工者、不動産関係者などからの相談を幅広く受け付けております。約三〇名の建築士の会の相談員が対応しております。会員の中でご協力頂ける方を募集しています。お気軽に事務局にお問い合わせください。

編集後記

筑波幸一郎・荒木公樹・牧野隆義

これまでの建築びとは、どちらかというと建築家個人にフォーカスを絞っているというビューをまとめてきましたが、今年度から、伝えるべき対象を広げるべく、第一弾を組織系設計事務所として歴史ある東畑建築事務所を取材させて頂きました。関係者の皆様には、年度末の忙しい最中にも拘らず、丁寧な対応をして頂き、とても感謝しています。この場をお借りしてお礼申し上げます。個人的には「光の建築家 陰の建築家」のくだりが、特に印象に残っています。

この会報誌の始まりの名称は「会報」でした。その後、「ひろば」に代わり二〇〇五年までその名称で読者に愛され続け、育てて頂きました。その間に経済もめまぐるしく変化し、消費税は三%から五%へ増税され、ようやく「建築家」の名称が定着してきた今、消費税は八%に増税され、このままでいけば翌年に大台の一〇%も現実味を帯びてきます。

関西経済界も厳しい時代をむかえ、片や地域情報誌の「大阪人」は休刊を余儀なくされている中、新しい名称である「建築家」も同じく時代の波に飲み込まれてしまうかも知れません。しかし、こんな時代だからこそ、会員の作品や会員活動など軸に、自らが情報を発信し続けることがとても大切だと認識しています。今後も、皆様の力をお借りできればと思います。

最後に、自画自賛ではありますが、会報誌名称の「建築家」もいい響きですが、「ひろば」も、とても良い名称だと改めて感じています。



旧東方文化学院京都研究所 デザイン 東畑謙三

この建物は、京都・北白川の自然に恵まれた閑静な住宅地に建つ。1930年に義和団事件の賠償をきっかけに設立された東方文化学院の京都研究所として建設された。現在は、京都大学人文科学研究所に附属する東アジア人文情報学研究センターとして用いられている。

東畑謙三が武田五一教授の指導のもと設計を手がけた。僧院を模したロマネスク風のデザインは、濱田耕作教授（後の京大総長）の発案による。館内は、閲覧室と書庫の尖塔に隣接して、回廊式に中庭を取り囲むように研究棟が配置されている。中庭には中央に小さな池と井戸があり、スペインのパティオ（PATIO）を模しているものの、下屋を持つ厨子二階のファサードが京町家の風情を纏っている。また、屋根瓦はスパニッシュ瓦だが、色はいぶし銀で和瓦の表情も併せ持つ。このように東西の文化が混ざり合っているが、学問と対峙し思索に没頭するための研究所として、この建物にまさる空間はないと強く感じた。

当時、ル・コルビュジェをはじめとする近代主義建築の理論的な思索を深めていた東畑が、悩みながらも前向きに取り組んだ結晶がこの作品である。ここでの設計作業が、建築は理論ばかりでは意味がなく、実務に携わらなければならないという思いへ傾倒していくこと、さらには分野の異なる人々との出会いにより見解が広がる重要なきっかけとなったことを東畑は語っている。社会の基盤となる建築を作り続けた東畑の出発点として、非常に興味深い建築である。

写真：田籠哲也 文：荒木公樹

